1982

大正十三年一月二十九日 第三種郵便物認可
大正十四年十月 一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

拾月號

【第八十號】

ワシ印レコード
オリエントレコード
朝鮮歌盤

株式會社日本蓄音器商會
京城支店

京城帝國大學圖書館

拾月號目次

（大體原稿到着順に依る）

人柱……京畿道廳　時實秋憑氏
百姓の樂……橋本豐太郎氏
AとBとの話……瀨戸醫院　瀨戸潔氏
カメラ……法務局　土居寛申氏
敗軍（短歌）……東拓會社　尾崎敬義氏
平南高勾麗の古墳……朝鮮鐵道　伊藤利三郎氏
毒にも藥にもならぬ話……今村　鞆氏
暗中對談……辯護士　山中大吉氏
寶生流宗家の事……道評議員　足立丈次郎氏
旅……木浦　福田有造氏
死……朝鮮佛教　中村健太郎氏
お山の人々……朝鮮新聞　久松前平氏
京城人……朝鮮銀行　崖　巖氏
家……朝明舍　石橋　滿氏
青春頌（詩）……專賣局　江口捨次郎氏
猶太來る……總督府　平井三男氏
無題……寺尾組　寺尾猛三郎氏
舞……第一高女　梶原峯治氏
陣構えの事……田村直一氏
財界ひとり言……京城日日　別府八百吉氏
病床哲學……東拓　尾崎敬義氏
秋風（短歌）……東拓　佐々木久松氏
凡人の閑……笠原要太郎氏
近著二つ……大陸通信　菊池長風氏
國境雜筆……朝鮮及滿洲　山村　翠氏
我家の簡易生活……京城電氣　寺村虎重氏
友を歎く（短歌）……角田不案氏
平南山中雜記……總督府　市村　毅氏
折萃集……李王職　池邊義雄氏
あゝ河西喜雄君安らかに眠れ……京城日報　角田廣司氏
靜に默禱をさゝげて……京城日報　山田勇雄氏
河西君の志を思ふて涙を知る……京城日報　多田毅三氏
魚攫みの名人が地に落ちた……京城日報　高須賀虎夫氏
詩學古事抄錄……古城梅溪氏
厄年觀……廣江澤次郎氏
非常線……佛教慈濟會　小水眞二氏
變手古な自殺……赤誠同志會　淺岡信堂氏
秋日雜記……永樂町人

雜題

丁子屋雜記……雲萬里
遺稿の出版……雜筆記者
合財ふくろ……吉田莊一
河西君の死……永樂町人
世上雜談……平田久雄
あゝ森夫人……雜筆記者
商賣往來……吉田莊一
新聞閑話……平田久雄
三中井の話……妙香山人
俗人俗語……雜筆記者
故人の面影……平田欠雄
赤褌の河西……吉田莊一
弱氣の將棋……平田久雄
古城氏近作……石川利夫

人柱

時實秋穂

宮城内の二重櫓門下の土堤から數百年を經た人骨が出たので、千代田城築城當時の人柱ではないかと云ふ説が流布せられて、一時人の注意を惹いた、其の後澤山の骨が出たので、人柱説は否定せられた樣である、それは兎も角、堤防工事などに人柱を入れると云ふことは、鳥渡面白い話であると思ふ私の郷里の近い所に、舊藩時代に開かれた新田があるが、度々の決潰に、遂に若い婦人を人柱に入れて、其の後決潰がなくなり、今では其の婦人を神に祭つて居る所がある、雖書を見ると、人を贄として河伯を祭る俗習とあり、長柄の架橋と經島の築港とに使ふたのが最も名高いとある。

人柱を入れると工事の強さを增すと云ふのは勿論一個の迷信に過ぎぬ、然し此の傳説はつまらぬ迷信で、取るに足らぬとして一笑に附し去るには餘りに惜しい心地がする、今日科學の非常に進歩した時代に於ても、天然相手の堤防工事など、中々困難で、折角學理の粹を集めた筈のものが、譯もなく自然の威力に壓倒せられてしまうことが少くない、科學の進歩の幼稚な時代に、一層困難であつたのは云ふ迄もない、眞に人柱を入れる場合を想像して見れば、之に入る人は勿論大きな犧牲であり、入れる事によつて、工事の安全を得やうとする人も、此の尊い犧牲に對して、自然眞劍にならざるを得ず、惹ては凡てを超越した或力を得ることになる、此の眞劍味此の威力が仕事の結果に表はれて、幾倍强固なものが出來上るのは何の不思議もない、人柱と云ふ物質其物は何等の關係がないとしても、之に伴ふ人々の精神は、慥に其の結果に對して偉大な或物を附加へるに違ないと思ふ、人柱を一つの形容として考へて見る場合に於ては、事に當るものが自分で人柱になつた積りで、仕事に當るとしたならば、其の結果が宜いころ加減の仕事に比べて、雲泥の差のあるべきは云ふ迄もない、此の場合肉體的人柱はないが、精神的の人柱が入つて居ると云ふて差支はあるまい、何れにしても、人柱が困難な工事を立派に完成する爲め必要なのは相當理由のあることであつて、人柱傳説は斯く考へるときに極めて意義あるものとなると思ふ

天野と云ふ人の書いた『民育講談』の中に、油島千本松と云ふのがある、幕府の命令で薩摩藩が木曾川の堤防工事を負擔させられた

〔二〕

藩命によつて其の仕事に當つたのが、家老平田靭負正輔である、勿論此の事業を薩摩藩に命じたのは幕府の政策から出たことで、薩摩藩にうむと金を使はせて、之を疲弊させ樣と云ふ爲であつた、出來かけた堤防は度々の洪水で流される、時には不思議な曲者の爲めに切られることさへある、人夫共は一向云ふことを聽かぬ、豫定の金はなくなる、平田等關係者の苦心は非常であつた、人柱の話も出た切腹して君公に謝しやうと云ふ者もあつた、人柱には誰がなる、一同の者が之に當ることにせう、切腹は事成つての後と覺悟を定めて平田の專斷で、而かも一同の者の努力で、資金を調達して、あらゆる辛苦の後、遂に此の難工事を仕上げた、而かも工成つて後、豫算超過の責を負ふて、平田初め五十人潔く割腹したと云ふ話であるが其心事の壯烈蓋し鬼神も哭すと云ふべきである、其爲に永く連年の水を防ぎ得て、血で培れた油島千本松は今に其悲烈壯烈を物語つて居る、之は又變つた人柱であるが實に尊い人柱と云はねばならぬ。

人柱を入れる事の必要は工事丈には限らぬ、一切の仕事皆人柱の入らぬものは到底本物にはならぬ魂の抜けた仕事は到底役に立たぬ我々は凡ての仕事の上に、自己を表現する覺悟がなくてはならぬ、仕事の上に自己の血と肉とを打込む決心が必要である、自己を人柱とする心掛のない人間には眞劍の仕事は出來ぬ、斯樣な人間には仕事は任されぬ、人柱傳説は單純な迷信として葬り去るには餘りに尊いものであると思ふ。

百姓の樂

橋本豐太郎

僕は二十七年間の官吏生活を罷めて、三年前から某農事會社の事業に干與して居るが、實は多くの趣味の中で何が一番好きかと尋ねらるれば、田園趣味以上に面白いものは無いのです、一寸指折り數ふれば十八年間鋤鍬に親しんで居るのですから一と通りの素養はある譯です、其内園藝に凝つた時代もありましたが、徒らに多樣の異種を集めて他に誇るの傾向は恰も虛榮の婦人が數十本の丸帶を買集め、又は流行を追ふて譽を盡すのに似て何となく卑しい氣分がするので只だ有りふれた花でよいから庭園に花を絶やさない工風をして居ります、それは朝露の中から生花を切つて佛前に手向けるのが何よりの樂みであります、次に蔬菜の方は發芽より開化、結實と朝夕の手入が面白く、又草取りや追肥の手遲れが直ちに發育に影響する所は全く子供の養育と同樣の感がありまして此の天然と親しむ氣分は何とも形容の出來ない快味を覺ゆるのです、或は園藝の趣味は高尚で蔬菜の培養は下品なりと評する者もあるか知らんが、僕は寧ろ反對に考へるのである、我が前栽の收獲物は常に之を近隣の知人に分ち、先頃龍山大洪水の際など一時野菜拂底の時に之を諸家に配布して孰れも感謝を受けたるは小なる慈善に値するかと考へられます、若し夫れ終日薄書堆裡に頭腦を勞せらるゝ諸君が歸宅後庭園に下り立ちて此の自然を樂まるゝ事は如何に人生の快事かと御勸めしたいのです、是には奥樣も御子樣方も一緒になつて趣味を分たれ、新鮮の蔬菜を晩餐の膳部に上せて共々舌鼓するの快趣は又格別かと思はれます、或は自分の宅にはそんな餘地が無いと一言下に擊退せらるゝ方があらば、試に最寄便宜の地に一頃の田を求められては如何、若しそれなくんば貸借も亦可なりです、人には何か道樂なしでは濟まぬが僕の過去五十年の實驗に鑑みて、田園趣味程神聖で、高尚で、且つ君子的のものは無いと考ふるのである。

江湖漫談

石川利夫

◎明治町の蜂谷印判店の主人、西海と號し、五目ならべは初段の力量があるといふ。

◎この西海大先生の門下には、京城の新聞界の所謂外交家が、ざつと三十名ほど入門し、晝夜の別なく、ぱちり〳〵とやつてるのだから凄ましい。

◎中にも京日の石川君、朝鮮日報の多田君、電通の岩本君など頭から湯氣が立つほどの熱心、車夫に急げ〳〵といつてるから、何處が火事かと思ふと、何のこと、きのふの復讐戰に、道場へ急げ〳〵

◎元山では、例のマアヂャン（麻雀）が大流行で、何も彼も手につかない連中に、西田元每、鈴木鮮銀、板垣稅關、畠谷海水浴の面々がある。既に研究會も組織し、いづれ全鮮の競技會があつたら、他地方のものをアッと言はせると、鼻の頭に、脂汗をピカ〳〵させてやつて居る。

◎大塚前内務局長のたよりに、御苑で東宮殿下のゴルフのお相手申しつけられたとある。光榮の至り——。

◎大塚氏といへば、赴任前に今日を豫想し、姿勢や打方に、苦心してゐたが、果して大宮人連中と試合して、朝鮮を恥かしめなかつたかドウか。

◎内務局その他の高等官連が、大塚氏多年の高誼を思ひ、皆で醵金して、葉卷入れを同氏に贈つたそして刻して曰く『家在南山下、讀書碧樹間、星霜經十八、鬢白一心閑』まことにその人にふさわしい贈品である。

AとBとの話

瀬戸潔

A『大部涼しくなりましたな』

B『蚊が居なくなつたので助かりまさア、漸く本でも讀む氣になれますね』

A『毎年の事だが此頃のやうな月を見ると又た秋が來た、今年もこれでお終ひに近くなつたのだといふ感じが深くなりますね、多忙なる年末などよりも却つて今頃が年をとつて行くのがしみ〴〵と覺えますね』

B『年末やお正月といふものが何んだかんだと內省的の生活をする餘裕のないのと、モー一つは寒さが强いので、そんな落ちついた氣分になれないのかも知れない』

A『高給の者が上に澤山居る時分はそうでもなかつたが、自分が高給者の部類になつて見ると秋が一層寂しいね、小供の將來など考へまいと思つてゐるが此秋はどうも何時の年よりも考へさせられるやうな氣持がする、或は近い內に首になる前徵なのかも知れないね』

B『僕なら首など切られる事は一向平氣なものだ。ソレモ不意打が尤もよいな、なアーに、五人、や十人の家族の生活費なんどはどうかなるものだよ、天道人を殺さずといふじやないか』

A『でも子供丈けは一通り學校を卒業さしてやりたいね、中學——高等學校——大學と順序よくね』

B『君はそんな事ばかりを考へてるから自分の首の事まで心配なんだよ、僕は小供の學校の事なんか更に考へないね、何よりも先づ健康第一だよ』

A『それよりかも內的に人物を練る事かも知れないね』

B『勿論そうだ、それだから僕はなるべく小供の學資なんかを蓄めるのに不贊成なんだよ、學資が充分あつて、大學を出る連中の顏を見給へ、顏面筋の緊張味が足りない、怜も田舍芝居の殿樣然としてるから』

A『それでも大學を出ると何れも樂々と出世するじやないか』

B『ノーノー、それは朝鮮のやうな古くさい處ばかりだらう』

A『內地だつて大學閥に弓を引く人は決して賢い人ではあるまいね』

B『大學を出ると安心してしまふものだから、何んにもする氣にならず、結局ダレなければならないやうに周圍がするんだよ、君最近當地を訪れた某經濟界の巨頭の話に依ると、我國の大正九年のパニックは大學卒業生が製造したものだそうだよ』

A『そうかね、では、今の大學は國家有用の人物を造るどころか却つて國家のため有害無益なものといふ事になる譯だね』

【四】

B『ウス、或はそうかも知れないね、僕の考へでは現在の日本の教育制度は宛然、紙屑籠に物を詰め込む樣なもので、パッシーブの能力がパシテーの大きさを試驗してゐるやうなものだ、他方面のアクテーブの能力アビリテーの方は頭から考へられないから大學を出るまでには其アクテーブの能力が醒めなくなつてしまうのだよ』

A『成程實際には、アビリテーの大なる者程一般的には、受けがよいからね腰弊に不向きな事もあるけれど』

B『ソレデ僕の現代に對する、教育方法を說明する事になる、小供には小學校を卒業させたら本人の勝手に任せて金なんか與れない事だよ、本人が何んとか考へて勉强したければ勉强するよ要之干涉せぬ事だ、そこでアビリテーが發育すると思ふがね』

A『實は日本一ともいふべき某大商事會社での話に依ると尤も成績の良いのは、甲種商業出の者で尤も不成績なのは大學出の所謂優等生とか秀才とかいふ連中なそうだといふ事を聞いては居る』

B『前に話した經濟界の重鎭の話に依るも、英國の大銀行や會社には大學出などは二人も居らず十七、八の頃から實務に當りながら傍ら勉强し自已を完成したものばかりなそうな』

A『まあ僕などは今日の如き有樣で終始するなら、大學教育無用論者だね、結論かい、平凡かも知れぬが子孫のために美田を買はずかね』

B『今夜は月でも見るかね』呵々

丁子屋雜記

雲萬里

◎

丁子屋といふ店には、いろ〳〵の不思議がある、と言つて何も妖怪變化が、ドロ〳〵と出現するわけぢやない――、それは言はゞ、晴天白日の怪であるいゝ意味での奇異である。

◎

支配人の机や、會計のテーブルには、どうかすると、小切手や札ビラが、山のやうに積まれることがある。そして、彼等が食事や用足しに、その場をはづすことがある。然るに、十年このかた此の店に限つて、曾て一度も、一錢の金だつて、紛失したことがない――不思議の一つでないか。

◎

六十九歳の店員、岸節さんと言ふのがある。もういゝお歳だから、自由務めにしなさいと店主がいふ。しかし一日に一度は店に顔を出さぬと、生きとるやうな氣がしませんと、岸さん不相變せつ〳〵働いて居る。勤續二十八年、よわい六十有九歳の店員――これも京城七不思議の一つだらう。

◎

この外に、二十年以上の店員は、建部永吉さんを筆頭に、十何人と數へることが出來る。どこにそんな店があるんだい。

◎

さう言へば、明治三十七年初めて丁子屋といふものを、京城に創業して、こゝにタツタ二十年、現在の大丁子屋を、完成したことが、第一不思議の冠冕でないか――。

◎

お客樣からいふと、唯だ一箇丁子屋洋服店である。けれど、その丁子屋は、決して間口十間のアノ本店に止つて居るのでない。

別に注文工場といふのがある

別に請負工場といふがある。

別に分業工場といふのがある

別に、子供服工場といふのがある。

そればかりぢやない、向上會館といふ別種の一つの仕事と、羅紗商品會社といふ、直輸入の事業がある。その他何、何、何――それらに從事する人員しめて四百五十何名である。

店主もなか〳〵やつたものですな――。

◎

その店主の小源六氏、今年五十九歳、堂々たる體軀の持主でさだめて物凄い人相の持主だらうと思ふと、大違ひ。實は見るから情味たつぷりの、ほんとにやさしい相貌の好紳士である。

道樂といふものは、一つもない。酒を好まず、女に溺れず、別莊、遊山に、姿本家振を發揮せず、若し道樂といへば、佛教普及と、鮮人を可愛がること、これが唯一の魂の喜びでせう。

◎

十萬の資財を朝鮮佛教團に提供したことは、正に世間周知の通り、凡そ佛教のことといふと金も體も全く惜まないのである

それからドン〳〵分工場を擴張したといふのも、慾からではない。何とかして貧窮な鮮人の子弟に職を與へ、生活に、安定を見出さしめたいため――こんなことには、實際勇氣と果斷とに富んで居る。

◎

一體、お父さんが、そんな風な人である。小林氏は、一層それを擴大したものである。

今では、小林氏は金を使ふ專門家で、わかい支配人の鈴木氏は、その兵糧方といつた勘定、しかも最後に感心するのは、一家を擧げて、おん大に『金を始末しろ〳〵』といはずに『つかへ〳〵』と激勵し、本支店を通じて、全員一致、おん大の道樂に共鳴、後援して居ることである。どうも不思議な大丁子屋洋服店ではあるまいか――。

◈お稻荷禮拜

平田久雄

永樂町の酒井婦人病院長、患家の間には、ズイ分評判のいゝ人だが、振つとるのは、邸内に稻荷の社を設け、一心に信仰禮拜しとることだ▲これには、同僚連もハテナと首をひねツて居る▲手術でもやる時は、そのお稻荷に祈願するのは勿論だが、かねて信賴する某易占家に『一寸日取りを見てもらいたい』それほど大事に大事をとる人だと。

京城雜筆

カメラ

法務局　土居寛申

【六】

▽

吾々日常の生活が如何に虚僞に蔽はれ不自然に滿たされて居るかは否定することも出來ねば又立證する必要もあるまい。

△

吾々が吾々自身を顧みた時に眞の我を發見し得ないときの悲しみ夫れは眞に我を顧みた人でなければ分らぬ。

△

吾々は一日の中たつた三十分間でもよい眞の我として生活したいと思ふ。

△

然し眞の我として生活するといふことは六かしい言葉であつて、實をいふと私にもどうして良いのか分らぬ、消極的ではあるが少くとも虚僞とか不自然とかいふことから脱して見たいといふのが念願である。

△

其の爲には色々の事をやつて見たが皆思はしくない只一つ最後に殘つて居るものはカメラである。

△

公私忙しい體であるから此の道樂にも自ら制限が出來る、從て自分の懷工合から見ても此なら當分續き得る可能性が多い。

△

僅か一吋か二吋のレンズを通してのぞく天地の自然、理學的には自然其まゝのものではないかも知れぬが、少くとも美化された大自然が些の虚僞もなく燦然としてビントグラスに輝いた刹那我は渾然として自然に歸一し、恍惚として我を忘れる其時の氣持は實に天地其ものであり自然其ものである。

△

雄大なる天地微妙なる自然其ものにありの儘直接する機會は常に絶えない、而もレンズを通して見たとき最も痛切に感ずる、理屈はどうでもよい、私はさう感ずるが故にレンズを通して自然を見ることを好む。

△

勿論良い機械もほしい、好い畫も作りたいといふ氣が常に起らぬでもないが、自然に歸一すること其ものとは別問題である。

△

私が朝でも夕でも一寸の暇にも重たいカメラを肩にして山に川に三脚を立てゝ喜んで居る心持を知つて呉れる人が何人あるであらう

△

私に言はすればカメラは自然を寫す道具でなくて自然をのぞく器械である。

◈合財ふくろ

吉田莊一

鮮銀の崖さん『近ごろ物を讀んだり、書いたりするのが、非常に瞳劫になつたので、君、醫者に診てもらふと、糖尿病だといふぢやないか』と、同じ病氣でも糖尿病はブル病だといふから、豪勢なものだ▲但し原稿を書くのが、瞳劫になつたとはご本人よりこつちが少々弱つたナ▲切山辯護士は、多くの同業者中でも、行方の最もハツキリした人でタチの悪い刑事事件などは、仲々ウンと引受けないさうな▲尤もこの人は、非常に情に弱いので、被告人が十分改悟したといへば『泣くな〳〵、僕が一つ骨を折つてやらう……』今度はアベコベに、力をつけてやるといふ評判だ▲高橋辯護士、最近關根名人の自から作つた將棋の駒を手に入れた、そして先生『この駒の初おろしには、是非とも松本（本社）さんと一戰やる』戰備おさ〳〵怠りないといふ風聞▲碁の事で、朝鮮火災の三崎さんを紹介したが、氏は書畫の鑑賞に於ては京城でも一權威で、それは玄いもんだといふ評判▲法務局の土居さん（行刑課長）初めて原稿を寄せられる▲これは、松寺さんの『土居君に賴みたまへ、それは仲々趣味がひろいよ……』といふ御紹介に依つてである▲いゝ寄稿家を見つけたと喜んで居る▲土居さんの奥さんが、女流作家として、鮮展に錚々の名のあることは、世人の知る通り▲近ごろ大評判なのは、本町ビルに整容術を標榜した平山梅子さんである、美人でおまけに劍道二段とある▲廊下などウツカリうろ〳〵しやうものなら……。

敗軀

奉天にて　尾崎敬義

江戸菊や我が枕頭の秋淺み紫紅の色と輾轉の苦と
二十より母はなき身ぞいたづきの心に寒き奉天の秋
枕頭に蘭を賣ひぬ其蘭に夕べとなれば秋の虫なく
隣室の患者死ぬらし病院の秋の夜更けて蘭は香れり
病院の灯やせて蚊のやせて人も痩せたり初秋にして
丈にあまる尾花の中に我立てりひそかに虫のなく音たづねて
子供等の鶴沼に避暑せるを思ひ出でゝ
鶴沼のまんじゅう甘し其の店の前のポストに文入れて行く

な世間といふものと、直面する必要がない。故人が新聞社の飯をあきらめ得なかつたわけだと思ふ。

◎

文章を書くことが、生存第一の愉樂だつたらしい、五行の雜報にも、魂をウチ込んでゐた、何十枚といふ長稿にも、一字の抹消さへなかつた。それを書く時の態度――大製作家が、畢生の力作に從ふやうに、その時のみ英雄としての河西君を見た。

◎

故人の思ひ出は、限りもなくある、木浦にゐた時、朝起きても、布團をしまはない、夜が來ると、その萬年敷きッ放しの穴倉の中へ、足の方からもぐつて行く。京城へ來てから、朝、顏を洗ふやうになつた。マダ小使として、十圓札をふところに有つたことがないと、こぼして居た。唯一の資產が、アノ金側の腕時計で、それはよく何處かの倉へ、入つたり出たりした。子供でもいぢると『オット、大變々々！』あわてゝ唯一の資產を洋服のポケットにしまつた君であつた。

◎

殆ど亡くなつた君とは思へない、『お宅ですか……』そして勢ひよくッカ〳〵とあがつて來るやうな氣かする。あの事あつて以來、私等夫婦は、きまつて朝の食卓に、君のことを話し合ひ、子供の手前も憚からず、涙を流し〳〵暮して居るのである

河西君の死

永樂町人

◎

秋晴れの街を、テク〳〵散歩し乍ら、ふと河西君の死を思ひ出し、涙が流れてしやうがないことがある。

◎

書、錢湯に行くが、湯の中できまつて河西君のことを思ひ出し、とめ度のないほど泣けて〳〵仕やうがないのである。

◎

一應は、景氣のいゝ男に見へた、粗野なほど元氣な男に見へた、しかしそれは故人の本質ではなかつた。

◎

故人は、小心だつた、內氣だつた、非常に弱い男だつた。子供のやうにあどけない處さへあつた。

◎

故人の氣質は、最もその將棋にあらはれて居たと思ふ。誰と差しても、いぢめられ拔いて居た、少しも他を、いためつけ、苦惱させるやうな強い――意地惡なところはなかつた。

◎

若し河西君が、一箇の生活人として、街頭に立つたら、それはアノ人の將棋と同樣、めちや〳〵に、世から人から踏みにじられたであらう。世の中に、たつた一つの隱れ場か、河西君のために、あましてあつた、それは新聞である。新聞社で好きな文章を書く――それに依つて、生活をつゞける。少しも冷酷？

平南江西の高勾麗古墳

朝鮮鐵道　伊藤利三郎

平壤の友人から招かれて、一日の閑を偸み折柄東京より來た同僚鈴木寅彦君及び日糖の金澤冬三郎君と共に、平南江西の高勾麗古墳を見に行つた。

九月九日の夜京城を立つて、十日の昧爽平壤へ著き、柳屋ホテルで、一時間計り休息してから、平壤の松井老、三浦兄の案内で、九時半頃自動車上の人となり、鎭南浦街道を走つた。

連日の雨で、道路は大分破壞されて居り、橋などヤット通じた許りの處もあつたが、幸に此日は快晴で同行の鈴木君が自分は精進がいゝから、旅行には未だ嘗て天候の爲に不自由をしたことはないなどゝ、自慢したこと程左樣に、大層天氣都合がよかつた。

『アカシヤ』や『ポプラ』の並木街道を通りぬけて走ること凡そ八里、江西の町へ入り、先づ郡廳を尋ねたが、自動車の音を聞つけて威風堂々たる郡守が現はれて來たので、來意を告げると、如何にも我意を得たやうに、早速案内の勞を執つてくれた、行くこと十數丁にして前面平坦な田畝の間に、三基の大きな土饅頭を見出した、そこで自動車から下り小畦を通つて、第一柵垣を施こした古墳の前に立つた。

郡守は柵垣の錠を外し、羨道二十有餘歩玄室の扉を開いた、アーチ壁の裾の所に、總督府と銘を打た銅製の掲示版があつて、それには『本古墳ハ高勾麗時代ノ陵墓ナリ』云々の文句があつた。玄室内はさすがに『ヒヤリ』として薄暗く、陰凄の氣身に迫るともいはうか、聊か氣味悪く感じた、用意の懷中電燈と臘燭で四壁の模樣を見たが、明るい處からスグ暗い處へ來たので、始めの程は何が何やらサッパリ要領を得なかつたが、落付いて石壁面を視ると連日の雨でか水氣浸潤ジメジメとして居る中を、ボンヤリとなんだか彩りのあるのが分つた。

そこで、更に燈を點じて郡守の說明を聽きつゝ熟視すると、成程青龍も鳳凰も麒麟も　次第々々に凡そ其形ちを認むることが出來た尙能く視ると彩色筆勢共に凡ならず、火焰を吐き、尾を掉れる格好や、目を瞋らし、足を張れる姿勢など、如何にも眞に迫つて居て、今にも拔け出しさうな描き振りで殊に天井の持送りに現はれてある唐草模樣の如きは、天井中央の雲龍を圍んで居て模樣として如何にも似合しい柄と見た。聊か褪色はして居るけれど最も判然殘つて居る色は、赤と黑と黃とであるが、

【八】

中に濃厚な眞紅は、恰も石の心までも浸み徹つて居るやうな色合で之が如何して千年から經つたものと思へやう。

龜甲の班紋、龍の片鱗、鳳凰の羽毛、麒麟の足、朱雀の銜むだ紅玉など實以て鮮やかなものである

明治三十九年頃に岡村某氏が、此墳墓を發見した時には色彩も『ハッキリ』として居つたとの事であるが以來四方より同古墳を見に來るものが多く、其度毎に玄室を空氣に曝らされたり又た手で摸索したりするものもあつたので、畫面は餘程損じて居るらしく、取り分け玄室の入口から突當りの壁面は光線直射の影響にも因らむか龜と龍と相爭ふものゝ如きは山の背景などもあつて面白い圖ではあるが惜しい事には一寸判斷がつかぬ程朧朧として居る。

郡守の話によると、此墳は今を距る千三百五十年前、高勾麗時代に出來たもので、其形より見て餘程高貴な人の陵墓で相當貴重の品を澤山に埋藏してあつたものと見える、それに就て一のエピソートがある。

數十年前半島の天地紛々たるとき、村に一人の青年があつた、夜な々々人里離れた此田圃に鍬を運び、陵墓の陰に隱れて窃かに仕事をした、それから數年間に亘りて變幻出沒世にも珍らしい高貴の品を或は平壤に或は京城に賣つたが誰あつて其出所を知る者はなかつた、其青年は後年妻を迎へ子を儲け次第に財も積み家も榮へて終には一村の長者となつた、併し永く平和は續かなかつた、長者一旦の病より精神に異狀を呈し、夜毎惡鬼に襲はれてありし昔を口走り狂ひ死に死んだ、それから長者の家

て、第一柵垣を施こした古墳の前に立つた。

して居るけれど最も判然殘つて居る色は、赤と黑と黃とであるが、鬼に襲はれてありし昔を口走り狂ひ死に死んだ、それから長者の家

京城雜筆

は世の指彈を受けて外道扱をされたが間もなく不幸續きで妻子も思はぬ惡病に取付かれ、一家悉く死滅したとの事である。

以來附近のものは之を神の祟りと唱へて懼をなし、その當時は古墳に立寄るものもなかつたが此頃では惡魔拂ひと稱して時々羨道の入口に香華を捧げるといふことである。

第二古墳はそれより數十間離れた地點にありて、同じく柵垣を巡らしてあるが、玄室內天井の構造は第一墳よりも巧に板石を持送りに積重ねてある、西壁の白虎、東壁の青龍、北壁の玄武、天井の男女天人圖や唐草模樣は孰れも第一墳よりも鮮明で而かも精巧である

玄室內には今尙ほ棺の石臺が二個駢んで居る、その臺石にも畫の具が點々として居る處を見ると、多分何等かが描かれて居つたものであらう。

我々素人目にも首肯かるゝ樣な此程の立派な理想畫が遠い昔しの高勾麗に、既に業でに考案されてあつたといふ事は實に驚嘆に値ひするもので、殊に描き惡くい龜い凸凹の石の面に雄健な筆勢を表はして、今尙ほ其跡を明らかに認ひることの出來るが如きは如何に當時の美術殊に繪畫が進んで居つたといふことも窺ひ知ることが出來る、又石に現はれたる繪の具の色が別に彫り込んだるにも非ずして只描かれたるまゝに、今日迄其各々の色を保存して居るが如きは併せて染料の技術の進めることをも知ることが出來る、不幸にして何等記錄を殘して居らぬからして、年代や誰れの墓であるやら又何といふ名人が描いたのであるやら、詳細を知ることが出來ぬのは、甚だ遺憾であるが、今一ッそのまゝ殘つて居る墓を發堀するならば、或は當時の記錄でもあらはれはせぬかと思ふ、聞く所によれば、尙此の外に、三墓里及び干城里といふ地方にも、同樣な古墳があるといふことである。

多分此附近が新羅の慶州城外と同樣、高勾麗舊都の近郊であつたことは確かに想像される、唯だ此邊は支那との關係が相當密接であつた因緣から、美術文學など前漢の時代に似たる處があると稱せられて居る。

金澤君は墓陵の附近に繁茂して居る雜草の中から、野菊を見付出して其葉の匂ひが非常に好い黨りを有つて居ることを高唱した、古陵靡條、四邊の秋色方さに闌なるを覺へた。

午後一時頃郡廳へ還り、再び自動車で平壤へ歸つたのは、三時頃であつた、それから松井老の二愛莊を訪ねて、庭砌に在る大磐石の自慢を拜聽し、次いで大同江畔の練光亭、牡丹臺下の浮碧樓、お牧の茶屋及び乙密臺に、古今の戰蹟や風流韻事を偲び、晩景旗亭玉屋に於ける金澤君の招宴に赴き、金玉蘭、金英月等平壤美妓連の酌に陶然となり、松井老得意の長唄に感涙を催して、平壤十二時發の汽車に搭じ、今朝京城へ歸つた。

（九月十一日朝記）

因にしるす、此行京城の數寄者數名が十一日我社の信川溫泉へ行つて呉れるとのことで、溫泉宣傳には好き機會と考へ、歸途序を以て東道の主となる筈であつたが、偶々急用が出來其約に背いたのは、返へす〳〵も遺憾であつた、失禮なれど玆に紙面を借りてお詫をして置く。

◈遺稿の出版

雜筆記者

◎何とかして、河西君の遺稿を印刷してやりたいと思ふ。故人が文章を作るに、いかに精魂をウチ込んで居たかを思へは、それを散逸させてしまふのは、友人としてたまらない氣がする。

◎二百頁內外のものなら、三四百圓もあれば、どうにかならうと思ふ。京日社は、骨を折る氣はないが。同社でやるとすれば、全くわけはないのである。

◎この雜筆社も、もう少し富裕であり、それでなくても、社外から誰か半額だけでも、援助してくれるものがあれば、喜んで任に當りたいと思ふ。

◎本號にも、君の寫眞を載せたかつたが、どんなに捜しても、近ごろのハッキリしたものがない。殘念乍らあきらめてしまつた。

◎河西君の病中死後、殆んど親身も及ばぬ世話をした人に、角田君がある、それから高須賀君、多田君――秋山君、その用斐々々しい友情を見ると、全く涙が流れるのである。

◎故人が生前、最も親しく交つて居たのは、加藤君（松林）でありこの一兩年爾汝の間柄であつたのは、多田君（毅三）である、共に繪を書く人であるから、出版するとすると、裝幀に、肖像畫に、ズイ分骨を折つてくれると思ふ――平生貧乏を悔まず、こんな時いつも貧乏を咀はざるを得ぬ。

毒にも藥にもならない話

今村螺炎

『御膝が濡れました、ハンカチを上げましよふか』

『マー默つて聽き玉へ、話は是れから蔗境に入るのだ、其美人と通路との距離は、硝子障子を隔てゝ、四尺位しか無いから、爪先、睫毛の微細まで明燎に見得るのだが、唯遺憾なのは、かんじんのおん顏んばせが、半分しか見へない事だ、折角の序でに全部を拜見に及んで、其嬌笑と媚態にチヤームせられたいと考へたが、傍へにボカンと佇立して居るのは、男子の威信に關するからと、故ざと離れで、象を見るよふな振を裝ひ、窃かに本尊の一擧一動を監視して居たんだ』

『互に顏を見合せて、向ふもニツコリ、コチラもニツコリ、都合合せて四ツコリと云ふ段取?』

『其奴が、有名なコツケトで、其の誘惑の網に引ツかゝり、ドタン場で、刺青の奴が飛出して、散々に搖らるゝと云ふ、落ちなんだらふ』

『イゝきみだわ、一ツつねつてやらふかしら』

『來る人も〳〵も、男女に拘らず其女には、皆目を著けるネ、其處へ一人の粹な、イナセの、女たらしと云ふ樣な、二十六七の男が來たんだ、其男は鳥渡立止つて見て居たが、無遠慮に硝子障子を開けて、女の背後へ手を差出して『ねゑさん敷島を一つ下さい』とやつたんだ、所で、美人は默つて微動だもせず、矢張小說に讀み耽つて居るんだ、君達は一體此女を何者と思ふ』

『判らんネー』

『啞の美人だらふ』

『キツトそふだわ』

彈く、唄ふ、差す、受ける、撥の手を止めて酌する……と云ふ風に、散財心理に興奮したる、小忙しき場面も、一ト時盛りを越せば官能の飽きと疲れによる、落つきが出來て、ボツ〳〵談話が交換せらるゝ。

『君、何か面白い話でもやり玉へ東京土産のホヤ〳〵と云ふ所を一つ』

『最奇拔な振つたのがいゝねへ』

『十八番の艶つぽい所を是非』

『御惚氣でも、我慢して聞いて上げるわ』

『ソーダネー、別に種も無いが……一ツ東京一の美人の話をしよふ、此れに見出しを付けて書くとすれば、差當り『四阿のトテシヤン』或は又『イブセンの名作』とでも題するのだ』

『クロスワの、鍵の文句のよふだネ』

『或日僕が、淺草の花屋敷に這入つたと思ひ玉へ、あの象の居る所の隣に、茅葺の小亭がある、其所は煙草を賣る店で、店番として一人のシヤンが坐つてる』

『出たぞ〳〵』

『淺草とは場所柄がよいネー』

『六區へ拔け無くて仕合せだ』

『默つて聞いて上げなさいよ』

『先づ二十七八と云ふ豐滿なる年增盛りの女だ、粹な柄の明石に薄紫色の本博多の帶を締めて、頭は丸髷に水色のテガラを掛け髮の恰好と云ひ、生へ際、襟足の工合、衣裳著つけ何一つ一點の打ち所が無く、スツキリとして、全く水のたる樣な女だ』

『誰れかに似て居るよふだ、髮丈は違ふが』

『ソリヤ君、東京の話か、京城の話か』

『ヒヤカすと怒りますよ』

『其女は、片手に小說本を持つて少しウツムキ加減になつて、一心に讀み耽つて、通りの方へ横顏を少し見せて居るんだ、君等は知つて居るだらふ、あの美人畫家深水の書いた『指』と云ふ有名な畫がある、エロチックスな所、あの畫そつくりで、特に腰の丸みの線、腕、指先の膨らみには、情熱が動いて居るよふだ、僕は東京に出て三ヶ月目に初めて美人らしい美人に會つたと丁度親の敵にでも巡り會つた樣な驚きと滿足を得たネー、君達にも見せたかつたよ』

『美人の方よりは、其時に於ける君の享遊病患者のよふな顏付が見度かつた』

『色情狂と間違へられて巡査に捕かまら無かつたのが仕合せだ』

『實際よく出來て居たねー、此鏡れは極秘密にやつて居るんだ』

『は、君ドーだい』

京城雜筆

『實際よく出來て居たねー、此銳き僕の眼を欺いた事程左樣に眞に迫つて居たからネ、併し熟ら考へて見ると、世間の偶像崇拜と云ふものはマーコンナたぐひのものだよ』

『君、東京の景氣はどふだネ』
『イヤお話にならん、不景氣だ』
『何の商賣が一番よいかネー』
『商品切手賣買業と云ふのが、一番よいと云ふ事だ』
『夫れはドンナ商賣だ?』
『東京市内の、各商店の、商品切手の賣買を業とするのだ、僕の居た時は丁度中元前だが、茲に先づ、三越の切手を買ふたと假定する、スルト其人は、物を買はずに二割引きで彼營業者に賣付ける、別に他人に贈物の必要あるか、又三越で買物の必要ある人がある、三越に行かずに、先づ彼營業者の所で買へば、十圓の切手が九圓で買へる、ツマリ兩方が一割をもふけるのだ』
『イロンな商賣があるものだネ、流石に東京丈で』
『花柳界の方面はドーダ』
『全くさびれ切つて居るネ、近頃花柳界にヤラトラと云ふ隱語が出來た、夫れはヤラズトラズの略で、先づ溫泉へでも同行する時に、出花を付けずに旅費支辨丈で同行すると云ふ樣な意味だ』
『ヤラトラで箱根へ行かん?』
『エー結構ですお伴しますわ』と云ふ如しだ』
『流石に東京の藝者は話せるネー不景氣の時代は、其システムでなくてはイカン、君京城へも其ヤラトラを宣傳し玉へ』
『まだ面白い事があるよ、近頃藝者のタクシーが出來た、而し夫れは極秘密にやつて居るんだ』
『ドンナ事をするの』
『藝者が坐敷著のまゝ運轉手になつて、客を乘せて郊外の人通なき所に行つて、ガーデンを下し電燈を消して暫く闇の景色を賞翫するのだ、つまり時代の頽廢が加層的になると、斯樣な變態的のものでなければ、官能を刺擊し得ぬと見へる』
『移動待合と云ふ形ちだネ』
『或客が其自動車に乘つたと思ひ玉へ、所で途中上野山内の入り口人通りの多い所で、ピタと車を止めて、何時まで經つても動かない、客は少し腹を立てゝ『ヲイドーシタ早くやらんか』とせかし立てると、運轉手は一向平氣なものだ『あなた一人で勝手におやんなさい』……と

『君何日頃歸つて來たの』
『あの水害の直後だ』
『汽車不通で困つたろふ』
『大阪から仁川迄直航の船で來たから樂だつた』
『ドンナ船だネ』
『夫れが君、一風變つた船だよ、船長以下乘組員全部が鮮人で、噸數八百食事も朝鮮料理だ、船に妓生が乘つて居て、乘客の無聊を慰する爲め、歌舞音曲をやるのは、氣が利いて居るよ』
『チットも知らなかつた、何時の間にそんな船が出來たかネ、そして其船の名は何んと云ふのだ』
『船の名?、夫れは『コージンマル』と云ふのだ』

世上雜談

平田久雄

朝倉辯護士は貞洞に小さつぱりした新邸を營みセツセと庭の手入などやつて居る▲同氏は、植木は非常な道樂で、これだけには決して金を惜まぬといふ▲もう一ツの消樂は、魚釣りで、日曜になると何處かの海か河へ、太公望の二代目をキメに行くといふ▲醫師でいろんな事に手を出す人に田中丸君がある、曰く、氷會社、曰く鑛山曰く土地賣買……聞いて見ると氏は佐賀縣牛津の呉服屋のムスコで、本家は今大阪で、米か株をやつてるといふ▲血を引くんだナ▲前の鮮銀副總裁鈴木穆さんは、人を統御することがヘダで、總スカンなどゝ呼ばれて居た▲處が、馬は、君ドーだい』

どんな別當も、ヒドク感心して居た▲役所に出るのに、乘つて行く歸りは、別當をつけてやる▲この時、若し別當が主人代りに、一寸でも乘らうものなら翌朝スグ勘づき『オイ、お前昨日乘つたな』と來る▲アノ人に感心するのは、この一點だと申すものがある▲河西君の追悼會で、今村螺炎氏と、角田不案氏とが出會する『先年は難有う』と螺炎氏禮をいふ何事かと思ふと、十年も前公論へ『蹴りし石の音尖る街月出でゝ』といふ句を投じた處、當時和歌の選者だつた不案君がヒドクその句に感歎し一文を作つてほめてくれたのだといふ▲十年目のお禮は面白い——こゝが俳味といふ奴か▲近ごろ螺炎氏安東縣へ旅しての句『漁人網をおさめて去るや蘆花動く』本人のおことわりに『支那だからな、思い切つて漢詩臭くやつたんだよ』

暗夜對談

辯護士　山中大吉

漢江の堤防が決潰した夜のことであつた。

Yは龍山方面の洪水見舞の歸り……十一時頃……H町に在る貸家の安否を見分する爲め、或る獨逸人の住む家を訪れた。其處には平生二人の獨逸人が住んで居るのであるが、其の夜Yは他に見馴れぬ一人の獨逸人を見出した。これこそ本編の主人公なのである。

その獨逸人と云ふのは、口元の引締つた、赭ら顏の、小柄な男であつた。彼の語調は彼が熱血漢であることを誰しもが直ちに肯定するであらうように熱辯であつた。

彼獨逸人は浴衣を無雜作に著流して玄關の壁に倚りかゝりYと對談し出した。

Yの性と職業とを知つた彼は、Yなる者は彼が訴へられてゐる或る事件の相手方と多少關係のある者であることを知つてゐた。（註Yは辯護士であつて彼を訴へた者の爲めにその事件の鑑定をしてやつたことがあつた）

彼は事件の眞相に就き、顏に、手つきに、或は大きく、或は纖かく、身振り巧みに表情しつゝ語り續けた。其の要領は彼が信賴してゐた一人の日本人に裏切られて、事業には失敗し、果ては訴訟まで提起せらるゝに至つたと云ふことであつた。而して最後に彼は熱した口調で、呪はしげにこう叫んだ

『不渡手形を發行して平氣でゐる日本の商人とは斷じて取引しません。手形を手形としての効力を發揮させ得ぬ日本の法律の支配下には住みません。債務者が反對に債權者を差押ふことを許す法律のある日本には住めません。私は支那に引揚げます』

と。Yは此の外國人の境遇に同情の念を禁じ得なかつた。そしてYは彼が少しでもそうした氣持を取去つて呉れる樣に努むることが日本人としてのYの義務であるかの如く思つた。Yは其の通り努めて見た、けれ共空しかつた。

Yは話頭を轉じて獨逸人の經歷に就き訊ねた、彼の答へはこうであつた。

『私は世界大戰の際青島に於ける獨軍の國民軍として從軍し、日本軍の爲め捕虜となり、總ての財產を失ひ、日本に送られて自殺を謀つたこと五度……』

諄々として語るこうした言葉は妙にYの好奇心を煽つた。彼は談中途にしてYを應接間に招じた。けれ共Yは今晩の服裝の失禮なるの故を以て謝絕した、だけど彼は、

『私は、あなたの服裝を見ません心を見ます、そうして心と語ります。』

と云つた。Yは其の言葉がすつかり氣に入つた。で、とう〳〵上り込んだ。

〔一三〕

Yと獨逸人とは卓を圍んで熱心に而かも打ち解けて更に語り出した。

獨逸人は何事かを偲ぶ樣な樣子で默然とした後、徐ろに口を開き

『Yさん私は私の親友を失つたことを今も忘れません』

と語るや身震ひして咽び出した。

Yは面喰つてゐたが、しばしして獨逸人に向ひ『その友情の麗しさに感激しますお心持を察します』と慰めた。彼は、やはら煙草の火を點じて親友を失ひて以來、幾十夜悶々の情に堪へず眠れなかつたこと、今晩も又眠れないであらうことを語つた。Yは日本人の中にも彼を裏切つた如き者ばかりでなく、彼に劣らない友情に篤い者がある事を告げて見たが、實感の前にこうした假想は何の權威もなく從て彼の慰めにもならなかつた。

Yは語を繼いで『貴下の其の篤い友情を以つて裏切つた日本人を赦してあげなさい、それは却つて貴下の慰めであらう』と勸めた。

此の時電燈はプツリと消へた。

——暗黑——Yは想つた、水は遂に發電所を浸したのかと。そして不安な想ひは一層濃くなつた。雨は更らに激しく降つてゐる、二人の話は暗黑の中に續けられた。獨逸人は

『そうです、基督は『汝を呪ふ者を祝せよ』と云ひました、けれ共私には出來ません、此の世の中に基督者は一人も居ません私を裏切つた友は基督者なんです、彼は金曜日……此の日は基督の受難の日で基督者には大切な日なんですよ……だのに彼は私の財產を差押へました』

こう語つた後、

『あなたは基督者ではないでせう？』

と味方を求むる樣な口調でYに念を押した。Yは生憎基督者であつた、で自分が基督者であることを答へた。獨逸人は默した後、

『い――え、基督ではありません、世の中には基督は一人も居ないんです、なぜなら皆、誰も罪を犯しますから。』

とこうした獨斷的な言葉を強い口調で云ひ放つた。Yは彼が基督者を神の如き完全な者と思つてゐることの誤りであること。基督者は自己の罪人なることを自覺し、基督の人格を慕ふことによつて少しでも基督に似ようと努めつゝ信仰生活をしてゐるのであるが、やはり人間としての弱點を持つてゐて事實上罪を犯してゐること、然しそれを悔ひて居ることも事實であること、信仰のない時よりもよい人間となり得る事を語つた。彼は

『完全でなければ基督者と云へません……世界大戰は誰が起したか』

と矢繼早に詰めかけた。

Yは彼に『貴下は生れたときも人間であつたらう、けれ共人間として不完全であつたらう、而して成人した今日もやはり人間であらう、而かも未だ以つて完全な人間とは言へまい、けれ共人間なるに間違ひはないではないか、その如く基督を對照とする信仰さへあれば、不完全であつても基督者と云ひ得るのである。世界戰爭を平和に導き、今日尙永遠の平和の爲め努力して居る者は誰ぞ。』と駁し立てた。彼は默してゐたが、稍あつて、語調を緩め、

『然し基督教は二千年の歷史を有してゐて、それ位の力しかないか』

と質問の矢を放つて來た。Yは『貴下は一秒を短しと思ふや』と問へば『然り短し』と答へた。更らに『宇宙の生命は？』と尋ねれば『無限であらう』と答へた。Yはすかさず『然り、無限の中の二千年は吾人の觀念する一秒に等しいであらう、二千年を何ぞ長しと云ふ』と報ゆれば、彼は又默した。

時計は暗黑の中に二時を報じた論、盡くべくもなければ、Yは辭意を告げた。彼はYの手を堅く握り、肩をたゝき、

『面白い夜でした、問題は六ケ敷くなりました、又たお出下さい』

と、恰も舊友に對するが如き態度で云つた。

Yは家を出た。やつぱり眞暗だ雨はまだ強く降つてゐる。時々自動車が怪物の樣に驅つてゐる。

Yは、世の中の人々が基督者を今の獨逸人のやうな見方で見て居るではないかかしら？、と考へたときに、恐ろしく感じた。そして更らに、基督者が不德を爲した場合、それを攻擊するに餘りに強くして、然らざる者が罪惡を爲した場合は、當然なるかの如く默過する態度を訝りつゝ家路に急いだ。

Yの頭には、變化の激しいその夜の出來事が夢の樣に思はれてならなかつた。

噫森夫人

雜筆記者

◎森殖銀理事の奧さんの亡くなられたのは、實に意外だつた。

◎運命といひ、壽命といふけれど、實に惜しいことをしたものと思ふ。

◎いつかお訪ねした時『あがりますか……』さういつてかすかに笑つて居られる、何事かと思ふと奧さん御手製の、牡丹餅の出來たのである。

◎奧さんの一生を考へると、西洋菓子のクサミのまるでない人であつた。その趣味といひ、よそほいといひ、人に接する心持といひ奧さんは、いつでも生地で行くといつたタチであつた。

◎全然、家庭籠城主義だつたけれど、それで、因循な人ではなかつた。一々の客人の筋合も知つて居れば、ズイ分輕快な御冗談も、お口に上つて來た、仲々さばけた人であつたと思ふ。

◎年齡からいつて、奧さんがあとに殘り、四五人の幼い人達を、教養して行かねばならぬといふ頭がいつも働いて居り、生活はジミでなくてはいかん、今のくらしなどは、一時の光りであり、いろどりである、それに幻惑することはおそろしいことであるとやうにふだん考へて居られたらしい。

◎『前の家で、私共には丁度よろしいんですよ』一度ならずさうしたお言葉を聞いた。誰か測らむあとに殘るべき人が、こんなに早く、こんなに脆く、家も、主人も數人の幼い人達もあとにして、遠い〳〵國へ旅立たれやうとは。

◎無頓著な、老書生然たる主人を助けて、それはいそしみの三十有六年だつた。そこに、寸毫の虛樂と、自己滿足とがなかつた、完き生地の三十有六年。

◎大きい不幸の日、主人公が、最後に靈前にさゝげられた一句

唯眠れ佛凉しくみまもれり

寶生流宗家の事

足立丈次郎

もう四年前の事である、東京から寶生の宗家が來鮮することに成つた、ソレハ丁度八月の暑さ盛りであつた、宗家を招くことを主として斡旋した一人として、僕は釜山迄出迎することになつて居つたが、折しも豪雨で鐵道が不通となつて行けぬ、宗家には武田喜男、今井竹二、大坪多喜雄の諸師が隨行して、先づ大邱にて素謠會を催ふし、次で京城に來ることになつて居つた、汽車は不通であるが、京城の會期がせまつて居るので、一行は止むを得ず大田から群山に行き、船にて仁川に廻はることになつた、ソレデ僕は仁川に出迎へた、待てども〳〵船が入つて來ない、其夜は遂に仁川に一泊、翌日午後四時頃漸く船が著いた、宗家一行は青くなつて大疲れの模樣である、聞けば群山は宿屋が滿員で樹脊市街をブラツキ、船は又滿載で而かも海上濃霧に遭ひ難航後れ食糧の缺乏を告げ二日一夜飯一碗づゝと四人で西瓜一つとで飢餓を凌いで來たとの話、金殿玉樓とまでは行かねど、東京では斯流の宗家として、又大家の三氏として、風にも當てぬ待遇を受くる人々が不眠不休、飢餓に瀕し海上意外の困難に遭遇せられたことは、實に氣の毒の至りに堪えぬ、サゾ朝鮮がイヤになつたであらふと思へばウント歡待でもしてやらねばならぬ氣になつた、兎に角京城に於ける素謠會の期日が翌日に迫つて居るので、スグ汽車に乘せ、京城の旅館へと案内した。

○

宿に著いて一行ホツト安堵し、其晩は休憩、翌日が大會である、公會堂は割るゝ許りの大入、宗家始め一行は素謠仕舞等を演ぜられた、疲勞の塲合にも係らず宗家の豐富なる聲音、鮮かなる舞には、滿塲魅せられてしまつた、其晩は二三の有志で千歳で歡迎會を催ふした、翌日も亦大會で公會堂は滿員であつた、夜は白水で斯流を汲む連中大合同の歡迎會を開いた、歸途又千歳で二次會となつた、一行若手揃ひで、前日の困苦は何處へやら大元氣、大騒ぎ、隱藝の續出であつた、跡で女將が僕に問ふ曰くアノお客樣はドウいふ御連中ですか、僕曰くアレハ謠の宗家の連中サ。女將曰く實は不思議のお客方と驚いて居ました、役人でもなし商人でもなし、學者達でもなければ役者でも無論ない、ソレデ玄人洗足の珍藝百出、謠曲の先生とは驚きましたネ——と、彼の海千山千人情哲學博士たる千歳の女將をして舌を巻かしむるほどの隱し藝はサスガに斯道の達人だと、僕も廻らぬ舌を巻いた、其後僕は元山にも同行し、一行が再び京城に歸つてからも、種々歡迎に努めた、花月別莊の大溫突が一行には特に氣に入つたやうであつた、宴會毎に女將や老妓連がお客一行を喜ぶこと客も夢中になつて罪もなき遊びに笑ひ興じ、屢々夜を更かした、こふいふ人々と遊ぶのは一種特別の愉快さがあることを始めて體驗した、一行も大滿足のやうであつた。

○

宗家が京城に滯在中、一日僕の草廬に訪づれられ、船辨隱の仕舞を直接手を取つて傳授せられた、素人に宗家が直接教授せらるゝことの破格は、朝鮮なればこそである、僕は非常にありがたく感じた惜しいことには今はスツカリ其手を忘れてしまつた、其後上京の節寶生會の演能に行つたら、特に樂屋で宗家から引見せられ（是も破格の取扱）、松本、野口其他斯道の元老達に紹介を受け、大面目を施した、のみならず其晩は日本橋の某料亭に招待を受け、宗家を始め武田、今井、大坪の三氏出席、僕の爲め盛宴を張られた、斯く宗家を始め一門の歴々と近づきになつたことは、斯道を樂しむ一人として誇りを感せずには居られないところが遺憾に堪えないのは其内の今井君、大坪君の二人が既に故人となられた事である、斯くも早く幽明處を異にせんとは、勿論想ひもよらないことで、實に哀悼の至りである。

○

僕は其後門司で一回、東京で數回宗家に面會し、演能も觀、素謠も聽いたが、回一回聽くたび觀るたびに、宗家の進境には驚かされる、宗家が大邱で演奏せられた時同地で主として斡旋に努められた松寺さん（今の法務局長）が、宗

家の謠を『鐵の如き聲骨』と評されたが、當時名評と思つた、其鐵の如き聲骨に隆々と肉かのつて、美味と滋味が加つて來るから、何とも言へない感じがするのである

我々が宗家を評するのは群盲の何とやらで且つ禮を失する恐あれど其音量の豐富なること、謠振りの雄大なることは、各流宗家中の白眉であると思ふ、而して型も愈々圓熟の域に入られたので故九郎翁も嘸かし地下で喜んで居られよう

京城雜筆

旅

福田有造

今年は旅つゞきで落付きのないこと夥しい、一月末から五ヶ月ばかり東京で暮し、釜山に一ヶ月、木浦に二ヶ月と云ふ有樣です。

旅はあはたゞしく、人生も旅の氣持です、それが平安な旅か、歡樂の旅か、苦痛の旅か、未だに分らず、その日〳〵を消してゆくのです。

何となく旅の哀愁を覺えつゝ何處へゆくや吾の姿は

河西君の死を聞いたのは、釜山です、あの丈夫な男が死んだとはどう考へても思へません、野次の好きな亦最も野次を朝鮮では具體化した邪氣のない男でした。

朝鮮の操觚界の中心地に行つてからの消息は時々聞くのみでした、だん〳〵年と共に洗錬されて行きつゝあつた君は、こんな突如な死の誘惑に逢はふとは思ひがけない事です。ユーモアウに富んで亦センチメタルな氣分もある男でしたが、そうしてまだ若い日に逝くとは涙なくて見られない人生の一經程です。

若き日の歡樂を見ずに君は逝く秋風の吹く九月の初に

とつ追ひつゝら若き妻と子を殘し君の心に涙ぐまるゝ

秋風も身に泌みる頃の旅は考へさせられます、何となく悲愁と寂寥とに滿たされてなりません。

秋の旅澄み切つた空、車窓から見た時、人の行末、世の推移など考へると涙ぐまれます、而もその悲愁と共に湧き出る悲哀の歡喜、之は日本人の特有性かと思ひます

明日から荒漠たる滿洲へ旅立ちます。そうして人の世の歸趣でも考へて見ましよう。

とぼ〳〵と旅から旅へと放浪者吾その如く歩み行く哉

商賣往來

吉田莊一

◎丁子屋洋服店で、パツタリ君、島砲兵少佐に會ふ、先生洋服の注文にでも行つたかと思ふと、否、否、丁子屋の番頭さんとなつてしまつたのである。

◎陸軍少佐の店員はおもしろい

◎この人、日露戰役では、奉天戰、沙河戰、ズイ分勇名をとどろかせた人である。

◎その後京日に入つて、腕ッ利きの記者の一人だつた……。

◎平田百貨店の主人を、智惠人君といふ、間もなく六十に手の屆く人である。最近百貨店學を、實地に見聞す可く、北米から歐州諸都市を巡つて歸つた。まァ京城としては、えらいあきんどの一人である。

◎平田といへば、二十年前は、あるか、ないかの微々たるものであつた。亡くなつた前の細君がえらかつた、美人で、愛嬌者で、その魅力で、今の平田の基礎が築かれたといはれる。

◎商銀の專務古宇田さん、仲々負けることの嫌いな性分である。

◎廣告雜誌の社員が、例の一圓の廣告をとりに行くと、古宇田さんそれを出す出さぬで、一時間もねぢ合ふ——流石の外交先生も、アノ人には齒が立たないと、匙を投げて居た。

死

中村健太郎

河西青苔さんが、お亡くなりになりました！、妻からこの話を聞いた時、あの無邪氣な、あの快濶なあの健康な、あの青苔君が、どうして死ぬもの乎、それは夢ではない乎、自分は、今しがた京城雜筆で『三人を羨む』と題する君の文章を讀んだばかりだと、この時ばかりは、自分で自分を疑ひました

ところが、それは事實でありました。硯友青苔君に、此の九月號かぎり、お目にかゝることが出來ぬかと思へば、今更ら悲しみが、新まるやうに感ぜられます。

◎

さて何時も、宿題になつてゐて解決のつき兼ぬるのは、實に死の問題であります。この問題のためには、悶へて華嚴の瀧に、死を求めた藤村某ばかりではありませぬ青苔君の死、これは人ごとだと思つて居ると、愈々十二月の大晦日になつて、狼狽せねばなりませぬ

私も、この死の問題に、幾度直面したか判りませぬ。一度は、長男の死でありました。次は擊劍の有段者であつた甥の死でありました。次は老母の死でありました。今度また青苔君によりて、突然として我が胸を躍らしたのは、死の問題であります。

◎

死！、死！、死、諸君この問題をど5片付けたら、人類からこの惱みを取り除けることが出來ませう？。

古來多くの宗教家や、哲學者やが、死に就て種々のことを言つて居りますが、孔子は『未だ生を知らず、焉んぞ死を知らむや』と言つて居られます。私は子供心に、それを讀んだ時は、何でもないやうに思つてゐましたが、今に至つて、この語を味つて見ますると、味へば味ふ程、深い趣のあることを覺へまする。

成る程、孔子樣の仰せらるゝやうに、此の生といふことが解れば死といふことも、自ら解つて來なければなりませぬ。それで生死の問題といつて、生と死とを同じく重大視して居る次第でありますがさて其の生といふことが、中々容易な問題ではありませぬ。

私も『父母未生以前の消息』に就て、血の涙を絞つたこともありますが、生とは何ぞやといふ、此問題が解からぬ内は、孔子樣の仰せの如く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らむやといふことになつて、何日までも、悶へ苦しむ外ありませぬ。

◎

昔、唐の國に、有名な學者で、總理大臣にもなつた裴休といふ人がありました。若い時洪州の刺史になつて、其處にある龍興寺といふ寺に參詣いたしました。案内されて奥座敷に往く途中、不圖見ると、廊下の壁に、何か立派な人の生き〳〵とした姿が書かれてあります。裴休はこれを見て『これは何人の肖像である乎』と執事に訊ねますと執事は高僧の眞儀と答へましました。

すると裴休は、成る程頭の天邊から足の爪先まで見事に畫いてはあるが、魂のない姿は、拔殼である。その人は何處に往つた乎と訊ねました。すると執事は、一向解りませぬと答へたので、裴休ば益繼しくなり、熱心に探しました。

此時、其の寺で、掃除をしたり薪を割つたり水を汲んだりして、色々の勞役に服して居つた一人の僧がありました。執事は、この僧が或は知つて居るかも知れぬといふので、裴休の前に呼んで與れました。それで裴休は、眞儀に就て色々と訊ねて居りますと、その僧は、聲を朗かにして『裴休』と呼びかけました。裴休は、思はず『ハイ』と應答しました。すると其僧は『その人何れの處にかある』と言に問を起して詰め寄りました裴休は、そこで即座に其旨を知り禮を厚ふして自宅に招待し爾來大道の研鑽に努めたさうであります

豈に圖らんや、此の僧は、かの有名な黄檗希運禪師が一時跡を晦まして、この苦役に服して居つたのでありました。

◎

『其人何れの處にかある』といふことも『死んで何處に往つた乎』といふことも同じでありますが、これは吾々が是非とも體得して置かねばならぬ人生最大の問題であると思ひます。（大正十四九七）

死！、死！、死、諸君この問題がありました。若い時洪州の刺史ると思ひます。（大正十四九七）

本町小話

白晝夢

本町ビルに、のぞいて見る。新築早々のことゝて、小さつぱりしてゐて、感じは悪くない。但し何分にも狭い、見物するの何のといふ餘裕はない。

◎

篠崎さん、もういゝ加減なお年寄りだらう、それに、晩年に臨んで、冒險的に、この仕事を始めたのはえらい。相當の成蹟を、あげさせてやりたいものと思ふ。

◎

篠崎さんといふと、その細君がえらい、金庫も、鍵も、印判も、すつかり、細君が握つて、仲々おん大の自由には、行かないといふ。友人が裏書一ツ頼んでも『どうもうちの方が喧しいので……』と、篠崎さん頭を掻く、『ナニ、細君が喧しいのぢやない、夫婦馴れ合ひで、そんなふうに、うまく斷るのぢや、ズルイ奴ぢや……』フン慨するものもあるが、實際細君の威望は、一門を壓倒して居る一寸議論をしても『ナ、ナールほど、お前のいふやうな理屈もあるナ』と、篠崎さんスグうしろ頭を、平手で撫でるさうな。和合圓滿の家庭として、先づはめでたう候ひけるとでも推讃して置かう。

◎

三丁目に、森川商店といふのがある、運動具や、藥品を賣つて居る。主人は、定次郎氏といつて、よく漢詩を作る人である。

この森川氏は近江の出身——その祖父に當る人が、近代の俳豪森川許六である。

こんな關係で、同氏の處にはズイ分めづらしい、許六翁の遺品が襲藏されて居る、との話である。

この店の番頭さん達は、大底雅人である、歌か、句か、漢詩を作る。例の京日川柳壇の奇才沈澱子は、この店の大番頭さんである。

◎

三越の加藤支店長は、新聞社員が會ひに行くと、何の彼のといつて、遁げをうつといふ評判がある。處が、氏をよく知つてゐる人の話では、それはまるッ切り誤解で、氏のやうに好んで人に接し、意見を披瀝し、また他人の言説を、よく傾聽する人間はないといふ。

これは、どうも後者の方がほんとうらしい。

それはそれとして、當地の支店は、どうも成蹟が面白くないのは、事實らしい。何でも橋本君時代には、半期五萬圓位の損耗をつゞけたらしく、その後北岡、加藤となつて、ダイブ改善整理を加へたが、それでも二三萬圓の缺損は免れぬらしい。

尤も敏腕といはれる現在の加藤氏が、二三年も居れば、何とかなるんだらうが。

◎

三越支店の一年間の廣告豫算が三百圓だといふ評がある。マサカとは思ふが、これが事實なら唯唖然……といふ外はない。

それで橋本、北岡諸君、いづれも借金をつくつたとは……これはどうも長唄を、うたい過ぎた報いぢやないかナ。

◎

本町で、書畫にうき身をやつして居るのは、例の森岱さん、醫師の鈴木茂さん、文港堂の主人公などである。

森啓さん、以前はズイ分いかゝ樣物を、つかまされたものである。しかし物は修養で、近來なか〳〵眼が高くなり、驅け出しの骨董屋などは、折角暑いのに一抱への大物を持込んで、あべこべに說諭を喰ひ、呆々の態でまかり退るとは、先生仲々やり居るワイ。

◈かぼちや飯

石川利夫

岡村介石居士、久しぶりに顔を見せる▲快句は出來ませんかといふと『かぼちや飯ほうばる軒や蚊喰鳥』とある▲今一つと所望すると『萬邦に令する振やラッパ草』……これは芝上會席上の作、先生得意の吟らしい▲介石君といへば、字がうまい▲一時雲耶山人を師とした頃は、妙に窮屈な字體だつたが、當節は師匠を離れて、元の自己流でやるので、却て大に妙味がある。

―ほゝ笑まれる―お山の人々

朝鮮新聞社　久松前平

◎

愉快なお山の人々、倭城臺に立籠る朝鮮十三道の總元締め總督府のお役人で運動家、雄辯家、趣味多き人、奇癖ある人、元氣者等はどんな人々かとのお尋ねですか、それは誠に面白いことです、一寸考へて見ませうかな……。

◎

それは何と云つてもオン大將の齋藤總督さんがニコ〳〵の大將さんですな、白髮童顏それ自體が既に圓滿福德の容ですからね、實際怒つた顏を見たことが在りません内輪の人も外部の人も同樣なんです、だから判任官でも時々お呼びになつて色々と聞かれる事があるさうですが、宛然お友達同樣の取扱ひで皆が恐縮してる位です、そこに心服が生れ、尊敬が表れると云ふもので、倭城臺の空氣が氣分が、秋空一碧のやうなのもそのせいだと思ひます。

◎

下岡政務總監さんは運動とか趣味とかの世界に乘り出される樣な時間の餘裕がとてもありません、朝の六時頃から夜も十二時、一時迄ぶつ通しですからね、イヤ事務と云ふよりも來訪者攻めです、苟も門を叩けばイエス、刺を通ずればオーライでせう、他人の話も能く聽かれるが自分も好く談じられますよ、それは皆さん御存じのこと今更私がお話する必要もありませんが、一寸面白いことがある、何でも朝食をお取りにならぬ、そして晝と晩にウンと搔つこむ、その健啖には驚く許りで何時もお臺所に番狂はせを演じさせ痛快がつて居られるさうです。

◎

チョコマンのくせに元氣者が居りますよ、農務課技師の綾田さんです、これは元氣の大將ですよ、產米增殖改良許りぢや無い農業は何でも御座れで當業者も米豆檢査の連中も十歩も百歩も讓つてる樣なエラ物です『お山の米の虫』と綽名がついてます程ですが、彌次團長としての優秀者です。

◎

運動家の方は大分居ります近頃は各局對抗の陸上競技を初めとして野球庭球何でも給仕に至るまで奬勵を怠らぬ爲めです、お山の人達が紅燈綠酒の巷に出入が薄らいだと云ふのもそのせいでせうと思はれます。

◎

三矢警務局長さん、草間財務局長さんの乘馬振りを御覽になりましたか、立派なものですよ、そしてお二人とも好く乘馬に依つて體

【一八】

格養成に努められて居られます。

◎

雄辯家としては平井學務課長さんが第一人者です、頭腦の明晰な所に持つて來て能辯ですから鬼に金棒と云つた調子で誰れ一人として感服せぬものはありませんね。

◎

そう〳〵藤原秘書官さんですね此の人は悪口屋の隊長であり、咽喉で發音する奇人ですが二つの癖があります、一つは口髯をムシリ通すこと、も一つは煙草狂ひですあのカイダですね、あれを一日に百本乃至百五十本です、そして淫哲學博士です、小河秘書官さんと來ては『お山の坊ちやん』で通つてる人ですが柔道で鍊へたせいか非常な頑健ですが、お山切つての大酒豪家です、此間政務總監の滿洲入りの砌も、乾盃好きの支那側をして『アナタ本當にエライ』と驚かした位ですつて、實際醉つたことの無い酒呑童子です。

◎

博物のことなら、何でも知らぬことなし、田中通譯官さんは朝鮮の小鳥研究者で專門家でも專門家そちのけですよ、藤波通譯官さんは春夏秋冬一日も缺かさず冷風呂に入つて居る。そして家族全體日光浴を續けて居られる、一種の若返り法ですな、長い藤波さんだが少しも年を取つて居らぬ樣に若々しい所から見てもですね。

◎

生田內務局長さんはゴルフも相當にやるが何しろ驚く可き讀書力の旺盛な方です、讀書道樂家とでも云つた方が宜い位でせう、內務局には氣運ひと云はれた人が二人居りますよ、渡邊老人さんと石黑地方課長さんでさあ、きちがいつ

も門を叩けばイエス、刺を通ずればオーライでせう、他人の話も能したか、立派なものですよ、そしてお二人とも好く乘馬に依つて體

京城雜筆

て高天原に凝てる方ですよ、朝鮮の社寺規則なんてみんな渡邊老人の手になつたものですが、お二人とも神樣のこと丶來たら全く氣狂ひですよ、今秋御鎭座の朝鮮神宮でも此お二人が居るので總てに萬遺漏無きを期し得るんださうですからね。

◎

國友警務課長さんの馱洒落と俳句は下手の横好きとして有名、田中高等警察課長さんの撞球と浪花節好きも皆さん先刻御知のことだが、田中さんの世話好きと來たら感服の外はありませんね、持ち込まれたらイヤと云ふことの出來ぬ性分で、人事百般相談所ですよ、お職務柄非常に多忙で全く私人としての時間なんか到底得られぬ方ですが、親切によく世話をなさる履歴書なんか何時も山積といつた有樣です。

◎

さう〳〵一度新聞記者室を覗いて見て下さい、夫は〳〵賑かなものです、各社代表三十名近くの方々が毎日集るのです、圍碁將棋盤ピンポンがあります、佐野さん、馬場さん、峰岸さん、高須賀さん野崎さんと云ふ飯よりも好きな方々の爲めに圍碁全盛ですよ、それに手八丁口八丁のお歴々揃ひと來てるから碁盤を中心に彌次る、議論する、大騒さです、治外法權の此室にも時々守衛さんから『モ少しお靜かに願ひます』と注意されることが度々ある位です、こんな風でお話すれば限りがありません何しろ澤山の方々ですからまだ〳〵色々面白い方、奇拔な方も多いのですが、其他は次の機會にお話することにして一先づ之れ位にして置きませう。

南山に登りて

笠原ふみを

佇みて汗をぬくひつ山峽のこゝ密林に蟬の聲聞く
みはるかの北漢山に陽てらしもよその山合は影をつくりて
山すそに見る城街をひた走る電車の音はもひろごりてゆく
南山の夏はよろしも草しげみしげみに寢ねて寒さ思ほゆる
あほむかに寢ねて梢の目にを親し葉うらかへして風そよに吹きつゝ
夕ちかみしゞまに鳥の音もさびし岩にもたれて物思ひする

新聞閑話

平田久雄

新聞社の社長で、その社の發行人から、免職を申し渡されたのは、朝鮮時報の川島君を以て嚆矢とする▲變つた男だけに、變つた辭令を突きつけられたものだ▲先生のことだから、定めて怒髮冠をはね返したことだらう▲結局一萬五千圓の涙金を握つて、釜山でブラ〳〵して居るとは、蓋し髀肉の嘆にたへまい▲有馬日日がいつか釜山に遊び、府廳の廊下でバツタリ會つたさうな▲スルト先生、日日を小蔭に呼びとめて『どうだ新聞を我輩に賣らぬか……』との相談▲さすが溫厚の日日もムツと胸にこたえ『君、馬鹿もやすみ〳〵言ふもんだよ』それッ切りさつさ〳〵と別れたといふ噂がある▲關根重憲君――號は白念――十年前京城では知られた記者だつたが、今は廣島に飛び、醫傭日日の主筆で、得意の筆を揮つて居る▲この間『事業と投資』の岩瀨君が、ひよッこり京城にやつて來た▲何んでも東京で、朝鮮の根岸の閑屋をしてるらしく、昔ながらに元氣は仲々いゝ▲京日の社會部長だつた渡邊四郎君、いつの間にか影を消してしまつた▲これには、いろ〳〵のイキサツがあるらしく、今でも渡邊君に、同情を表して居るものもある▲それも、問題にするほどの大人物ぢやなかつたがね▲地方の新聞經營者で、評判のいゝのは、やつぱり西田元山だ▲地方で職を失つたものは、大底京城にもぐッて來、何か彼かにありつくのだが、どうも地方の社主連中でよく言はれるものはない▲そこになると西田元海は、仲々甘くやつとるものと見へる▲利口な男だからね▲平壤の二つの新聞は、どつちもキユウ〳〵言つてるとの評がある▲それでは、一つにしたら……これも一度合同して見たんだが、やつぱりうまく行かず、再び今の二つに還元したんだとは、困つたナ……▲不相變新物が出るな、經濟日報で元老格だつた加納一米君今度東京を發行處として『朝鮮經濟新報』を出す、何でもダイヤモンド式の、氣の利いたものだとかいふ。

京城人

朝鮮銀行　岸巖

◇この夏、久し振りで內地に行つて、東京大阪あたりを廻り歩いたが、歩いて居る間はちつとも自分が田舍者になつたとは思はなかつた。なるほど建物は高くなつたし、自動車が多くなつたし、カッフエーの樣子も大分變つたが、それ等の光景に包まれて居る自分は朝鮮に住んでからもう六年以上になるとは云ひながら、毫も古ぼけて居るとは思はなかつた。のみならず、暫らく遠のいて居たお蔭で昔無條件でありがたがつて居たものを、今度は一段上から批判し得る能力を具備して來たやうにさへ思へた。

◇そこで、古い友達などに會つても、をめずをくせず一廉の批評らしいものを振廻したことだ。例へば、『災後幾年も經ない東京に高雅の趣や瀟洒の味を求めるのは無理だが、それにしても餘りに荒んで居りはせぬか。歌舞技座のあの構へなどは、どう見ても感心出來ない。無論昔の方がよかつたとは云はぬが、あれだけの金をかけて新しく建てるんなら何とか工夫があり相なものだ』とか。

◇或は『連雀町のやぶそばはもつとうまいやうに思つて居たが、今度たべて見ると、まるで蕎麥の匂ひがない。どうも東京人は一般に蕎麥と云ふものの味に鈍感のやうだとか。

◇或は『新富町の竹葉の鰻はも少し喰べられるやうに思つて居たが失望した。難のない所と思つて中アラを賴んで見たが、どうも味に乏しい。京城の江戸川だつて、あれ位のものなら喰はせることがある。あすこも丸の內や京橋側や方々に食堂を濫設するやうになつてから墮落したのかね』とか。

◇或は、大阪で、つるやだの富田屋だのと云ふ一流所で御馳走になつて置きながら『大阪の藝者も形態と云ひ內容と云ひ一向進歩しないね。矢張藝者といふものは滅亡すべき運命を持つて居るものかな』とか。

◇かやうの有樣で押廻つて居るうちに、一夕京都の木屋町で谷崎潤一郎の御馳走になつた。双方醉がまわつて氣焰やら議論やらを戰はして居たが、ふと谷崎が『君も一見した所さう昔と變らぬ樣だが矢張著しく朝鮮味を帶びて來たね それが好いんだとか悪いんだとか云ふのではないが、兎に角、茫漠とした感じを帶びて來たよ』と云つた。が其の時は、それは小さい汽車に乘りつけて居る內地住人からさう見えるのであつて、こつちの文化人としての價値には一向妨げにならぬものと思つて居た。

◇ところが、歸りに釜山の土を踏んだ時、初めて一方ならぬ心のくつろぎを感じた。愈々京城に歸り着いて四方の山を眺めた時、自分の住むに最も適はしい所に歸つて來たと云ふ樣な安心を感じた。矢張自分はいつの間にか京城人になり濟して居たのだ。何しから壓迫を感じつゝ內地を歩いて來たのだつた。

◇今にして、あの高い建物、夥しい自動車の間を縫うてあるく自分の姿を思ひ返して見ると、何となく不調和だ。電車の中で、加藤內閣の壽命がどうの、長者議員の選擧の形勢がどうの、と云ふ政治論を傍聽して居るのは柄でない。矢張鷄が生れたとかダリヤの種がどうだとか云ふ話を傍聽して居た方が柄相應の所だつたのだ。

◈頬杖ついて

平田久雄

黃金町一丁目に、日蓍の支店が出來て、折々美しい妓生や、藝妓連が出入して居る▲支店長は、大須賀さんといふ、マダ若い人だが、仲々の活動家、交際家と見へて、狹い京城では、日蓍の大須賀さんといふと、モウ知らぬ人はない位▲その大須賀さん、つく〳〵嘆息して曰く『初めて店を開いたんですから、それに初めての土地だもんだから、ズイ分苦勞がありますよ、妓生や藝妓を喚んで——さぞ氣樂だらうなんか思はれては、やり切れません』▲西大門署で、署長が中心となつて、署員の爲の文庫をつくりつゝある▲何分金の出處がないので、圖書の蒐集には骨が折れるらしい▲本社でもわづか乍ら奮つて數種の書籍を寄贈し樣と思て居る▲讀者の御賛成を願ふ

年立つや新年ふくべ米五升

家

朝明舍　石橋滿

旅人と我名よばれむ初時雨

芭蕉を思ふ時私には日にやけた背の低い男が振分荷を背負はせた一人の弟子を連れて、朝日に光る露の野路をほがらかな氣持でゆつくりと旅より旅に歩いて行く姿が目に浮ぶ。

俳諧と旅――それが彼の命ではなかつたらうか、然し此の樂しい旅から歸つて來た時、彼の顏には不思議にも憔悴と疲勞の色とが見受けられた。彼にも亦旅はうきものと思れた。

三十八才の九月『侘びて住む』境遇にふさわしい六疊一間の庵――師の爲に提供した深川六間堀の杉風の別庵――其處に彼れ自身を見出した時、初めて言ひ知れぬ悦びと安堵とにくつろぐ事が出來た。そして古びた家の濡縁に腰を掛けて晴れ渡つた秋の空を今更の樣に眺めた。自分の家――ふさわしい庵。それは只だ芭蕉の爲にのみ天の造つたものと思れた。

芭蕉植えて先づ憎む萩の二葉哉

彼は庭に自分のすきな木も植えた。此の淋しい姿。人目に立たぬ花。おのがまゝにずん〳〵伸びて行く性。彼は芭蕉の一株を殊によろこんだ。

平和な日が續いた。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉

そんな夜もあつた。雨晴の小春日和に草葺のつくろひをさせるのも却つて樂しかつた。其の内に一度火事に災されて甲州の旅に出たが、翌年には又同じ處に簡素な草堂を造つた。

年立つや新年ふくべ米五升

深川の宿には大きな瓢があつた弟子達は庵を訪ねてくる時の御土產にソット瓢の中に米を入れて置くものもあつた。

彼はこうした平寧な作を得る程安泰な正月を迎へた。

私は芭蕉庵の彼と思ふ時、常に自分の家――それは借家でも良い――しつくりと自分の生活にはまつた家がほしくなる。虛榮の殿堂や空想のなぎがらを背負つて居る現代人の生活――私は第一に其れをのろふ。（旅人芭蕉に依る）

青春頌

江口捨次郎

鮮少女よ
溫突家屋のやうに
そんなにも燃えやすい
僕の感情を騷がさないで呉れ
僕の五官を硬ばらせないで呉れ
からころ、からころ
りぶみかるな
日本娘のやうな下駄音は
讀書の眸を譯もなく
窓ぎわに牽きつけるよ
僕はとつて置きの眸の景物として
ふふはり、ふふはり
乾き切つた道路の上に
ひからびた心情の上に
奇羅美やかな桃色のまた紅色の
ばらそるを浮ばせる時が欲いのだ
鮮少女よ
僕はお前の下駄音に煩はされて
日本娘を取り逃すかも知れない
鮮少女よ
『日本下駄は日本人のものさ
ごむ靴でも木畜でも履たらどうだ
と僕の眸の訴へる
若者の心情を適て遣ては呉まいか
註　近時鮮人間に盛に日本下駄が用ひられてゐる、安價と簡易との爲だらふ。

◇松本市から

加藤松林

今東京から歸つて來ました、院展は思ひの外、つまらなかつたし、二料は知人の出品があるので親しく、評判のフランス展は、うつくしいものでした。

大分變つてゐます、蕃呂木氏へは寄れませんでした、月末には亦たゆつくり行きますから、その時は是非にと思つて居ます。

信州の秋はうつくしい。

何か通信したいのですけれど、まだ落つきません、いづれ其中――

御大切に（十四日信州松本市にて）

猶太來る

平井三男

赤色露國の支配者はロシヤ人では無い。ユダヤ人である。世界の黄金の支配者も、亦たユダヤ人である。ユダヤ人程數奇な運命と、不思議な力とを有つ民族は、古往今來、歴史に見出されぬ、故國を有たぬ千四百萬の漂泊民族は、言葉通り天晴れな天下の浪人である而も上帝メシヤは何の時にか、此の世界放浪民族を以て、地上一切の權を支配せしむべし。我等は上帝の選民なりとの信念は、大盤石の民族信念である。斯くして、萬里浪々の旅にさすらふユダヤ人は果して先づ世界の金權を掌中に收めた。

現代世界に、孔雀の樣に派手やかな金權振りを見せて居るものにアメリカがある。上下二千載、世界の隅々に酷遇せられ、迫害せられ、虐殺せられ、天地のあらゆる悲運を一身に負ひ來つたユダヤ人には、組木細工、寄合世帶の新國アメリカは、地上復と發見し得ぬ無上の樂土であつた。そして、生馬の眼を拔く其の財的辣腕は、著々として此の新大陸の資源を攫んだ。今や世界第一と誇るニューヨルクの大都は上帝の『約束の地』『新エルサレム』であり、かのロツキーの峯々は、シオンの山であると迄廣言する程になつた。四百五十萬のユダヤ人は、アメリカ金權の支配者である。國内に蟠龍虎踞する眼に映らぬ强國である。

伯林大學のゾンベルト教授が、『ユダヤ人と近世資本』の中に云ふたやうに、北米の經濟組織は、ユダヤ人の力に依つて發達し、ユダヤ魂を以て充滿して居る。アメリカはユダヤ人に依つて存在して居るのである。アメリカ魂とは蒸溜したユダヤ魂に過ぎないのである。

ユダヤは世界の謎である。其の金權を攫んだ隱れたる手は、列强の咽喉笛を扼して居ると云はれる。況んや世界の有數なる新聞、其の他の言論機關は、殆んど擧げてユダヤ人の支配の下に在る。黄金の力と言論の力。之はユダヤ人の雙手に掌握して居る、世界制御の二大勢力である。全世界の邪教徒を咀ふユダヤ人の世界的反逆の筋書なりとして、英國操觚界の重鎭モーニングポストが摘發し、ロンドン、タイムスが堂々の論評を浴びせた『シオンの古老のプロトコル』と稱する秘密文書は、全ユダヤ主義の實現の爲めには、此の二大勢力の壓倒的支配權を占むるの必要を宣言して居るが、眼前の事態は其の現實化を明示して居る。

ユダヤ人は萬國に散らされては居るが、立派な一國民を爲して居る。我等は雌伏すれば、革命的プロレタリヤとなり、雄飛すれば、我等の怖るべき金力も亦雄飛する。

之はユダヤの生んだ巨材の一と目せらるゝヘルツル博士の公言である。斯くて風雲を得たシオン主義は、無智にして尨大なる露國民を踏擧として、八方活躍の三番叟に入つたのである。

ユダヤ人移れば、世界金權の中心移る。ユダヤ人は世界金融の低氣壓である。西班牙が昔年ユダヤ人を抱擁した時代には、西班牙は地上の黄金中心市場であつた。ユダヤ人の放逐と共に、此の中心も亦去つた。斯くして、今や英國より移り來つた中心勢力は米國に永久の基根を下さんとして居る。アメリカの識者中、ユダヤ禍を絶叫するもの漸次多きを加ふるも、寔に故ありである。安値堅牢を以て飛躍せる自動車王ヘンリー、フォードの如きは、屈指の一人である然し、繰出す蜘蛛の網の手に、最早アメリカは十重二十重に絡まつて居る。基督殺しのユダヤ教は基督教國の大看板を誇るアメリカの心魂までも食入つて居る、一石を投げて、二羽の雀を落した上、其の石までも取還さねば已まぬユダヤ魂は、米國民の祖先達が、大西洋の波を分けてメイ、フラワー號に載せて來た、氣高い信仰のピューリタン魂に取換えられつゝあるのである。

ユダヤ金權を代表する大小人員は、枚擧に堪えないが、就中、今英京ロンドンに本據を構ゆる巨富ロスチヤイルド卿の先代、ナサンロスチヤイルドの驚くべき敏捷はユダヤ魂を說明して餘りあるものがある。彼は獨逸フランクフルト

市に風來した、一ユダヤ小商人の三男坊であつた。市のユダヤ町の一をも餘さじと買占めたのはナサンの手先であつた。廿日は斯くても角も乘出し見るべしと云ふ。渡りに船とは此の事である。斯くて

京城雜筆

市に風來した、一ユダヤ小商人の三男坊であつた。市のユダヤ町の片邊りに、金貸を開業して漸次成功を收めたのである。

事は今より百十年の昔、西暦千八百十五年に遡る。無敵の馬蹄に全歐を蹂躙した英雄奈翁は一敗敢なくも零落の身となつて、伊太利エルバ島に窮困の幽囚となつたが、猛虎再び檻を破つて、其の年の二月廿六日島を脱し、三月廿日復び巴里城の覇者となつた。當の怨敵英國は勿論、全歐色を失ふて驚愕した。中にも失神せん許りに驚いたのは、株屋ナサン、金貸ナサンであつた。今やオータールーの大決戰は目前に迫つた。彼は一身の興敗今日に在りと覺悟し、性來の小膽病を顫慄しつゝ蒼惶として佛國に渡り、英軍の追擊に尾行して戰場に向つた。一滴の血に目を廻すと云はれた臆病ナサンも、今は自奮自勵、フーゴモン附近の或る安全地帶に身を隱し、合戰の趨引を手に汗して注視した。形勢非なる奈翁が、最後の一擊に轉ぜんとするや、バネ仕掛の人形の樣に飛上つた彼は、覺えずロスチャイルド家萬歳と絶叫した。

彼は即刻踵を回し、一切の人間に目も與れず、狂氣の唖者となつて一目散に戰場を駈出し、出放題の高値に頓著なく、一輛の馬車に飛乘り、ドーバー海峽の南岸オステンドに馳著いた。時に海上風波激しく、英國への渡船を雇はんとすれども一人の船頭も應ずるものが無い、僅か二十哩の對岸である彼は五百フランより八百フラン、遂には千フラン一約四百圓に驟上けたが尚無効であつた。其處に最後の一人が現はれた。二千フランの前金出し放しの條件ならば、兎も角も乘出し見るべしと云ふ。渡りに船とは此の事である。斯くて英國海岸に乘りつけた兩人はもう半死半生であつた。ナサンは直ちに困憊の軀を驛馬に載せ、息をもつかずロンドンへと突進した。電信電話も無き當時の英國の上下は一向に歐洲戰場の模樣に焦心して居つた。そして、英軍は敗北らしいとの評判は、誰云ふと無く聞えて來た。

六月廿日。知らぬ顔のナサンは平素の通り株式市場に平氣な姿を現はした。然し彼は顔面蒼白何となく取亂して居つた。之に目を著けた同業輩は、ナサンの手許には必然面白からぬ通知が這入つたのであると、耳語し合つて居ると、ナサンはボツ〳〵と手持の品を手放す模樣である。市場は誰云ふとも無く動搖めき出した。ロスチャイルドが賣出した。此の一擊は忽ち市場の暴落を出現した。公債や株の賣物は潮の樣に市場に溢れた一をも餘さじと買占めたのはナサンの手先であつた。廿日は斯くて過ぎ、廿一日の夕刻、買占物がナサンの金庫に滿腹した頃、ウォータールーの大利戰、ウエリントン將軍の大勝、奈翁敗軍の注進がロンドンに到著した。此の一擧はナサンの金庫に二千萬圓を增加した彼の死後、彼の長男第三代ナサンが、世界の大長者として男爵の榮冠を贏得たのも、全く彼のユダヤ的機敏と巨財とに因つたのである

昔賴山陽は、蒙古來る、蒙古北より來ると詠じたが、今やアメリカの經濟的帝國主義は、東より太平洋を超えて、亞細亞の核心支那に食入り、ロシヤの革命的共產主義は、勃然として我が北陲に圖南の鵬翼を張つて來た。前門の虎、後門の狼ではあるまいか、虎狼の正體看破し來れば全ユダヤ主義の隱れたる手では無いか。

吾人は敢て、ユダヤ來ると國民に警告したい。

卓上小閑

吉田莊一

◎朝鮮には古い菊池長風氏である。その長風氏が、今度『朝鮮讀本』と、『民族讀本』との二ツを書いた。記者は、その校正中に、處々をひろい讀みしたが、ズイ分我々にも、參考となり、智識となる本であつた。

◎長風氏は、これが自己の思ふ如く普及し、自己の願ふ如く人々の頭に浸潤したら、自分は滿幅の喜びを抱いて、立海を渡つて、內地に歸つてもいゝ。これで朝鮮に對する總ての負ひ目を、返し得たやうに思つて居るといつて居る。畢生の著述であることが判らう。

◎內田竹三郎氏から『惜森小松夫人』と題して、二つの句を寄せられた。

夜盜虫の喰らひたるらん土用花
六人の遺愛穩いに秋近し

◎もう十五六年にもならうが、內田氏は一時『滿鮮の實業』といふ雜誌をやり、それは相應に繁昌したものである。何かのことで、一狀したが、氏が朝鮮の雜誌界の先驅であり、亦た一箇の快男兒であることは爭へない。

◎氏は、目下南鮮で大きい殖林事業をやつて居る。氏の口吻を假つていふと、何百萬圓、何千萬圓の事業である。どうかこの老丈夫の、晩年に光榮あれ。

無題

寺尾猛三郎

◎故横田千之助氏曾て士族の稱を廢せんとするや、各々異れる主張の下に喧ふべき二つの反對論が起つた。

◎一は頑迷不靈なる士族連の、無意味の階級を維持して憐むべき虚榮心を滿足せしめんとする愚說であり。一は輕燥浮薄なる評論家の、階級打破の偏見に捉はれたる華族の制度をも廢せざれば徹底せずとする僻論である。想ふに横田氏は實質上何等の區別も無く、徒らに不便を感ずる士族の名を廢せんとしたるに過ぎざるべし。華族は嚴存せる制度にして、名ありて實なき士族と豈同一視することを得んや、若し之を改善し、或は廢止するの必要ありとせば。這は愼重に講究すべき別箇の問題にして階級打破の精神とは全然沒交渉なるものならざるべからず。

◎階級に實ありて名なきものあり名ありて實なきものあり。名實相協ふものは理想の制度なるべし士族と平民の差別は名ありと雖も實は渾然融和して戸籍以外殆んど差別の痕跡をも遺さず。今若し汝は平民にあらずやと威張る士族ありとせよ。平民は侮辱を感ぜざるのみならず、却て其士族は瘋癲病院に送られずんば幸なり。其平民の今日あるは、差別撤廢を叫びたる爲めにあらず、反抗したる爲めにあらず、暴行したる爲めにあらず。唯實質に相應したる位置に立てるなり。强要する反面には實質の伴はざる點なきや。水平社諸君三思せざるべからず。鮮人諸君も亦以て他山の石となすべし。

◎古來我國は儒教、佛教、西教等の渡來に因り、一再ならず外來の危險思想に逢著せり、我等の祖先は巧に之を咀嚼し。消化し、排泄し、以て能く國幹を培養せり。マルクス或はクロポトキン一派の思想に對し、我等は祖先に恥ぢざる胃腸の頑健を如實に示さゞるべからず、世上何んぞ忽ち病菌に冒され發熱し、狂躁し、譫語する徒の多き。

◎人あり。我國體を磐石の堅きに比し、危險思想更に畏るゝに足らずと傲語す。知らずや、點滴石を穿つ。況んや澎湃たる狂瀾怒濤不斷の激著は、遂に大地を侵蝕せずんば止まず。磐石の堅きも豈天壤と共に無窮なることを期すべけんや。吾等は唯進んで此れと鬪ひ勝つの氣力なかるべからず。

◎彼等は恰も狂瀾怒濤の如く、外は海の四面より、內は風水の相應するありて、滔々として皇國を侵蝕せんとす。磐石の堅きを恃んで、袖手傍觀すべき時ならんや。我等は砂となり土となり、皇室の源泉より混々として流れ出づる江河に隨ひ、直ちに思想海に突進し之を埋め、之を退けざるべからず然して此處に千里の沃野を出現せしめざる可らず。此れ我等の祖先が日本帝國を創建したる故智なり

◎マルクス、クロポトキンの徒を以て、釋迦、基督、孔子に比するは、蟻垤を以て丘陵に比するが如しと雖も、彼等も亦一世の哲人たるに愧ぢず。犧牲的純眞と殉教的熱烈、加ふるに博辯宏辭、高遠なる哲學を說き去り說き來るところ、熱あり血ある青年男女の多くが渴仰崇拜するも又故なきにあらず。人類の幸福を求めて社會を改造せんとす、其志甚好し。唯惜むらくは彼等、社會の缺陷と暗黑のみを見て其の全豹を見ず。人類の神的一面を見て、其獸的反面を見ず。平等無差別の假想と、天賦人權の幻覺とを基礎として、實行すべからざる方法を以て、實現すべからざる夢想殿を築き來らんとす其努力は畢竟徒勞に屬するのみならず、結果は世道人心を荼毒すること測り知るべからず。

◈荒修行の話

平田久翀

龍山大村百藏君、眞夏の暑さ盛り——午後二時といふのに、しつかり腹帶を卷き、熱汗淋漓、例の義太夫をうなつて居る▲毎日これなのかと言ふと、これが避暑旅行のかわりぢやとある▲えらい修業をやるものぢやと、これぱかりは恐れ入つた▲大阪文樂座にのり出しホン物の人形を使つて、堂々と義太をやつたのは、少くとも朝鮮では後藤虎雄君一人、四五年前のことだが、この且那料一晩金參千五百圓也。

たる爲めにあらず、反抗したる爲　源泉より混々として流れ出づる江　百圓也。

江湖閑話

江渺々

◎

平壤大銀の事務豐田（明敬）君が、圍碁初段の免狀を有つてることは、事實である。だが、その實力は、小杉謹八君とドウだらうといふ程度――それならどうして免狀をもらへたかといふ疑問が起る。處が、免狀もいろ〳〵で、同じ初段にした處で『實力を認め之を許し候もの也』もあれば『斯道熱心につき、之を與へ候もの也』もある。豐田君その後者を得たんだと聞けばハハンと御承知か行くだらう。

◎

圍碁でも將棋でも、免狀授與の內容は滅茶なものである。家元が金が欲しくなると、誰にでも濫發する。近い例は、將棋の名人關根氏が、それだつた。京城に來て、十四五校も濫授したであらう。貰つた中には、ほん物の初段に、兩桂といふやうな手合が、矢張り初段をもらつて居る。先づは見切り大安賣といつた姿だから、權威も何もない。そしてそれが宿錢のたしになるんだから、呆れ返つて、物も言へないね。

◎

朝鮮史編纂委員の中には、ズイ分かわり物が居る。稻葉君山……あれなどは、別物として、痛快なのは、加藤灌覺君だらう太平町あたりの安下宿に、晏如として、陣をすえて居るが、朝行つても、晩行つても、一度だつて宿に納つて居ることはない。『一體先生は、どこへ行くんでせう』といふと、宿でも『さア私共でも、不思議に思つてゐます』とのこと、兎に角先生、風の如く、雲の如く、四六時中飄々として、歩き廻つてるのだから堪らない。

◎

伊藤（憲郎）判事の文藻は、知らないものはない。けれど、伊藤夫人が、極めてよい歌のよみ手であることは、近ごろまで知らなかつた。

おのづからいのりの言葉ものぼりくるかりそめならず尊きこの日

これは、大正八年三月、新婚の日詠まれたものである。それから新郎新婦は、しばらく海のほとりへ、めぐまれたる旅をつづけられたが、その折

さくら貝君とひろえば半日の興つきずして入る夕日かな

といふ作もある。今年四月第三女のさよ子さんが、マダ二つといふのに、惜しや鬼籍にのぼられた。

人形やおもちやと共に今はなる巡禮の姿思へばかなし

恐らく、讀んで泣かないものはあるまい。

◎

濕つぽい話になるが、あはれだつたのは、倉橋文書課長附の給仕梅谷正夫君――といふ少年の死だらう。倉橋氏と同じ日に發病し、一週間ほど遲れて死んだ。病中も『課長さんはどうでせう』と見舞に行く人々に訊いた。それほど、課長思ひだつたマダ十八歳とは、何としてもいたましい話だ。

◎

易の岡村介石君、斯學に就て疑問が起ると、殖銀の野田氏の處へ行つて相談する。野田氏ケロリとして居るが易の事は、仲々研究したものである。支那のは勿論だが、現在では、アメリカ易が面白いといつて居る。世の中のイヤになつた人は、よろしく松嶺洞へ行くんだな。

◎

易といへば、殖銀の森理事のうちに、ふた月ばかり前鮮人の賣卜者が來て、それが書いて行つたものに『正室二人』といふ字面がある。夫人と共に、これはおかしいなと笑つて居ると、今度の凶事があつた『易といふものも、馬鹿にならないなア』と、森氏つく〳〵浩嘆して居た。

◎

その森夫人の逝去の日、有賀富田、藤井その他の人々が、ざつと十八名森邸に行つてゐたがそのうち五名まで、曾て夫人を喪つた苦い經驗の持主だつたにはお互に吃驚したさうな。先づ富田翁を筆頭として、飯泉さん、松原さん、守屋さん――それに誰だつたかモウ一人……。

◎

近頃の不景氣に、シコタマ儲けたとの評のあるのは、德力本店である。無論金で――その儲けは、タイしたものとの世評。

舞

梶原峰治

私は性來犬が好きだ。別に犬公方を氣取つた譯でも何でもない。たゞ好きだから好きなのだ。食事と寢床を一緒にすると云ふのだから、其好きさ加減も知れる。

京城の宅にも二三匹ゴロ〳〵てるが、其の中私が學校を卒業して初めて職に就いた折から苦樂をともにして來た『舞』と呼ぶ狆が居る。丁度今年九歲だから犬としては可成りの高齡者である。齒は脫け視力も衰へてるやうだが、それでも仲々元氣で朝夕の送迎を怠らない。『舞』とは源平合戰で名高い驛戸の古跡、天城在の『鳳舞の松』からとつた名前である。玆に書く事はこの『舞』についてゞある

『舞』が京城に著いたのは昨年の末、雪や氷で地上は覆はれた寒い日の夜であつた。『舞』は犬專用の小さい箱に押し込められて遙々朔國岡山から寒い京城に送られたのである。

一晝夜以上の斷食は『舞』にとつては初めての經驗であり、零度に近い溫度は初めて感じた寒さであつた。しかし此極寒も飢渴も『舞』にはチツトも不平ではなつた。否、私に會つた刹那、不平も憤怒も一時に忘れたのかも知れない。『舞』は私を人込みの中に發見するなり私に飛びついて處構はず邊り構はず私の頰を舐めるのであつた。其態度は喜び其ものであつて筆舌のよく盡す所でなかつた

京城驛まで出てくれた友人に京畿商業の重松雅兄があつた、兄は絕へず『舞』の擧動を眺めて居たが其兩眼には涙が漂ふて居た。

重松兄からその時の感想を聞いたのは數日後であつた。何んでも兄は私達を出迎えてくれた翌日自分の擔任の生徒に對して一場の訓話を試みたそうである。從順の德の美しいことについて。

『舞は岡山から狹い箱に押し込められたまゝ、一椀の飯一簞の水は愚かパンの缺片だも與へられなかつた。所謂文字通りの飢渴と極寒に苦しめられ、無極の虐待を受

げて居ながら猶且つ自分の主人に對しては絕對に從順であつた。もし之が人間であつたならば或は三十時間の不安と苦難を並べ立てゝ大に意氣卷いたかも知れね。之がこんな場合に直面し人情の經路かも知れぬ。しかるに『舞』は尾を振り手の舞ひ足の踏むところを知らず狂喜した、其態度は從順其ものであつた。從順は其ものを美化する』と。

重松雅兄は今日でもよく當時の感想を話すが餘程深く感動したらしい。事柄は些細である、他人にはさして問題にならない事も、その時の氣分によつては重大な問題となる事が多い。『舞』の場合も全くそんなんだらう。私は『舞』を愛したけれども『舞』から教訓を得た事は少ない。それが偶然にも重松兄には一の教訓、從順の德として表はれのだ。恩を仇で返して別段不思議にも思はない現世の人々には頂門の一針とでも云へやう。眞の從順は其人を眞に美化するものである。

偶成雜詩

清谷惠眼

讀李白詩集

鳥花風月自然觀。觀處天眞無異端
我愛詩仙李太白。一言一句徹心丹

題于曉亭書伯塔影之圖

憶昔洛陽東寺頭。五重塔下樂淸游
今看紙上之眞跡。群鳥去來百尺樓

欣日露條約成立三首

修交漸結北京城。日露締盟親善成
往復析衝時五百。兩邦從是太平聲
赤露思想何足憂。忠誠意氣在神州
如今惟恐驕奢俗。須策通商富國謀
天產大藏箇極果。露民牧蓄自然風
日人須計通商事。親善修交兩國豐

勸忍之德

忍字實行衆善源。自他相愛德風敦
是之不老長春法。瑞氣堂々滿一門

告白二首

故國由來商法隆。在鮮吾亦習之風
非才不適牙籌術。再入桑門半百翁
貳拾餘年事々空。在鮮永日愧無功
自今活躍精神界。須盡四恩報國忠

乙丑節分

福豆散來箇節分。社頭追鬼滿祥雲
去年此日風邪臥。今歲是時無病欣

見するなり私に飛びついて處構はず遇り構はず私の頬を舐めるので

往復析衝時五百。兩邦從是太平聲
赤露思想何足憂。忠誠意氣在神州

福豆散來箇節分。社頭追鬼滿祥雲
去年此日風邪臥。今歲是時無病欣

陣構への事

田村直一

此の不景氣に仕事を始めやうといふには非常な決心と覺悟とを要することは言を俟たないのです。

それで誰もが申し合せたかの如く先づ背水の陣を布いてと云ふ事になる。

此の男性的で悲壯な覺悟や決心、雄々しいものだとは思へども、私はどうも共鳴しかねてゐたのです。然しながら純プロの吾々が何事かをしやうと云ふのには、勢い此の背水の陣に據るより外に途がない。それで先づ此の覺悟で名乘を擧げやうと決心した私は、東京の先輩に其の覺悟を告げて同意を求めたのです。

ところが返事は電報で來ました。ヂンガマヘキニクワヌヨセイマ一コウノヨチアリ、ヒヤミヅヲノンデシアンメグラセ。

隨分亂暴な返電です、けれども大體自分も氣に喰つての事でないから、出鼻を打たれたのを動機に、先輩の言葉に從つて冷水を飲んで一考することにしたのです。

そしてフト思ひついたのは講談本などによくある昔の大きな戰爭には、三十六段軍懸りなどと云ふ陣容が書いてある事です

此の筆法で行けば如何なる事でも目的を達成する事が出來るに違ひない、斯うした準備が欲しいものだとつく〳〵考へて見ました。

が、それは思ひもよらぬ難問題なのです、何か外によい陣構へはと講談本を漁つて見ると『鶴翼の陣』といふのを發見したのです。

無論眞物の陣形を見たわけではないので、文字から想像して畫を畫いて見ました、あの長い嘴で長い首筋を充分先方に突き込んでる大きな胴體それに體の五六倍もある廣い翼、堂々と濶歩する長い足を縮めてそれにプロペラのやうな尾羽子まで書き加へて見ました。

これで或は高く或は低く前後左右に進退動作、自由自在。

背水の陣で後のない相撲をとるより此方が良いに違いないが今自分には、鶴の頭と嘴だけで大きな胴や廣い翼がまだ出來てゐないのです。

私は胴や翼を完備する事に致しましたそして出來上つた胴と翼に小さな頭から、胴振ひと羽叩きとを命じました試運轉は先づ良好なので、此の事を再び先輩のもとに通知したのです。

其返事が亦電報です曰く『ヨシ、オモイキツテトベ』更に手紙で『背水の陣は最後の問題に候へば最初に於て執るべき手段には無之候、若し其の覺悟あらば如何なる陣容を作るにもさして困難はなかるべくと存じ敢へて一考を促したる次第に候』

私は背水の陣を布く積りで陣替へをしたのですが、果して鶴翼を充分に張つて飛躍し得るか最後の背水に迫るかは、自分ながら頗る興味ある問題なのです

月刊『朝鮮警察家庭新報』を發行するに當りて（九月五日）

◈世間ばなし

石川利夫

平北知事の谷さんが、マダ轉任と決らぬ前、一日例の三田光一君が訪問し『アナタは近く榮轉なさいますね、塲處ですが、塲所は呑氣な處ですよ』いくら相手が千里眼でも、谷さんマサカと思つたものだ、處が二週間ほどすると、今度の辭令……▲辯護士の入江義之助氏、ダイブ變つた人だと聞いたが、新聞雜誌で氏をほめるものがあると、スグ購讀をよしてしまふ▲尤も攻擊すると直に購讀を申込むかドウか、そこ迄はたしかめなかつた▲前鎭南浦府尹の橋本さん、龍山に隱栖して農事會社を遣て居る▲碁も有質さんに二目くらゐ行けるし、將棋も高橋（章）さんに伯仲といはれる腕がある▲その他俳句なども、滿更らでないらしいから、京鞮雅客の列傳には遏す可らざる人物▲前全北知事の亥角さん、在任中盛んに運動を奬勵したものだが、先日の全鮮選手權大會にも、詰襟姿で入京し全州軍の一擧一動にのびあがツたり、かがんだりそれは〳〵イカイ御心配の容子。

財界ひとり言

別府八百吉

僕の京取觀

花々しく生れ、鳥渡花々しかつたが一向その後花々しからず、事の大に志と違つてゐるのは京取市場であらう、朝鮮の取引所令がいつ出るか、如何なる內容を以て出るかは姑く置き、夫れが出れば京取市場は當然株式取引所たるべき運命はもつてゐやう、又もたするために釘本前社長はあの宏壯な建築をしたものであらうが、數年來の振はぬ狀態からあの堂々たる大建築を設計し、尙ほ今の建物でも大正十七八年になつたら狹くて困るだらうといふてゐた三四年前の事を思ふと、變れば變るものだと云はざるを得ぬ。

京取市場の最大弱點は、その拂込資本金の殆んど全部を土地と建物に固定させその資產收入の極めて少ない點にある、若し市場が現在の如く不動產に資金を固定させてゐなかつたら、今日のやうな不振にあつても相當の業績を擧げ得るであらう、釘本前社長は京取の母としてその功績は十分にあるが一時の中間變態景氣に眩惑されて將來を達觀し來るべき反動に備ふる準備を缺いだのは大なる失策であつた、氏は今京取の相談役として責任の地位に立つてゐないから氏の縮尻を攻むるのは愚であるが建築を大にした許りでなく諸事を著しく面倒ならしめてゐる。例せば仲買の許可の如きも一の現物市場である以上、他の現物市場同樣簡單に重役會で選任し得らるる事として置けばよかつたのに、ゴ大層にも總督の許可を要する事に態々總督府に賴み込んだ——總督府は市場で許すがよいと云ふのに——ため、今日仲買たらんとしても出願から許可までに無慮半歲もかかり、出願當時の有資產者も、許可當時の無資產者といふやうな滑稽も珍らしくない。

京取としては、設立當初の目的たる地株の賣買は貧弱な現物店に殆んど全く奪はれてゐる、而して辛ふじて大阪と朝鮮の三四の投機株の賣買でお茶を濁してゐるにすぎない。京取の將來としては株式取引所たる事であらうが、よし株式取引所に昇格した所で、その機能は現在以上に發揮し得られやうとは內地や滿洲の例から見て想像し得られない、果して然らば取引所昇格は稅金を夥課されるのと、株主の最も苦痛とする拂込み徵收のでないかと思はるる節もある、一種の會社經營法であらう、その上場一本で京取を活かすために猛進すべしである。

『二八』

（內地法は取引所の拂込資本金は公稱資本の半額以上となつてゐるから、京取も十圓の拂込みをとらねばならぬであらう）をすることにより反つて惡材料と化するに相違ない、一方京取株は大正十年の百四十圓臺、翌年の百圓臺から二十圓そこ〳〵の安値に沈み、各所に高値の集團株があり、此の株の暴落による被害者は到る所に轉がつてゐて、株と言へば恐ろしいもの孫子の末までいらはすまいといふ恐怖觀念を多數者に與へてゐる、京取無用論者が京取設立以來何一つよい事はない、而して惡果は到る所にありすぎると云ふてゐるのは一面の理である、從つて此の京取の局面轉換は容易のことでなく、現狀の推移では結局仲買も市場も自滅の外なきにあらずやと慮れられる。

京取振興策といふものも、屢々議せられてゐるが一向名案もないやうである、そこでぬる湯に入つて秋の日に自然に沸かすといふ式の時期まちの外施す術がないとも當局者はいふてゐる、僕等の見る所では京城の如き貧弱な財界で株式取引所一本の道行は六ケしい、そこで商品の併合上場乃ち米の上場を策する外京取の活躍は大戰後の變態景氣の如きがない限り六ケしい、米の上場問題については色々言ひたい事もあるが、夫れは後日にゆずり、市場當局は米の併合成し得る見込みがあると思ふ、火災保險が三期で處女配當をするに

十一月號原稿は、いつもの通り十月十日までにお送り下さい、一日でもお早いことを祈つてゐます（雜筆編輯局）

上場一本で京取を活かすために猛進すべしである。

獨歩する者

數年來京城に創立された會社事業中、事志と違はず、少なくも事志に近い程度で進んでゐるのは先づ僕の見る所によると煙草元賣捌會社と朝鮮土地經營と、書籍印刷と、火災保險の四社位に留まるやうだ、その他の多數會社は當初の目論見や計劃は反古となり、或は倒れ、或は細り、或は氣息奄々として漸く虫の息が通つてゐるにすぎないと云ても大した過誤でない

四社の中で煙草と書籍印刷は多年の基礎と熟練ある官業の繼承並に官業の取次であり、火災保險は特種會社で官憲の保護がある、獨り朝鮮土地は純民間の會社だが、之れは三好和君の所有不動産を繼承し三好君に家賃や地代取立てが仕事とすれば、格別京城事業界の誇りにもならぬやうである。

煙草會社は官業の仲賣機關であるのに一割六分といふ株式配當をやつてゐる。夫れは少しウマ過ぎるといふ說もあるが、專賣局としては此の會社が二割も三割も株主配當の出來る位煙草の捌けることを衷心希望してゐるに相違ない、從て配當の制限とかいふやうな事はやりさうでない、殊に此會社は高木社長以下煙草屋連中が重役でその堅い事に於て又經費を出し惜しむ事に於て、利益の多い會社として實に珍とされてゐる、百萬圓の會社で一割六分の配當をしてゐると言へば大抵色々の關係方面で騷かれるものだが、殆んど音も事もなく、寧ろ新聞雜誌の外交方面からさへ存在を認められてゐないのでないかと思はるる節もある、一種の會社經營法であらう、その重役の中に廣江澤次郎君がある、廣江商會の經營者として東亞煙草會社に對抗した時は、花々しくやつたものだが、現在會社の重役としては殆んど屁もひらぬやうである、夫れで會社の他の重役連は廣江君を花形として推稱してゐる、廣江君も壽年時代から壯年時代に入り、他に事業の經營もあり、此の會社に專らなる能はぬ事情もあるのらしい、が會社の經營殊に獨占會社のヤリ口は艶消しに限るといふ考へを君も出してゐるのだらう、尤も此の儲かる會社も不景氣で賣行きが多少わるいかして、此頃では空袋引換へに景品附の賣出しをやつたりしてゐる。

書籍印刷はあの擴大な地面と工場設備を殆んど只同樣に總督府から借りてゐる、而して之れも獨占の書籍印刷を中心に一般の印刷に從事してゐるが、何としても副社長の河內山君が十數年の官吏生活を司計事務に終始したといふ位數字に明るく、事務の伊藤君は又此會社の虫と言はれる程事務に精通した重役とて、成績が豫期の如く擧がるのは當然だ、然しここにも不景氣風は學校書籍の古本使用を生ずる傾向のあるのと、今一つは儲けの多い一般印刷に積極的なる能はず、努めて消極的にしてゐるやうだが、夫れでも同業者から民業壓迫——此の會社も民業だが家主が政府のためか——を唱へらるるのに稍弱つてゐるやうだ。

同じ河內山君の主宰する火災保險會社は僕等の見解では最も將來のある事業だと思ふ、未だ創立後三期をすぎただけだが、既往の實績から將來を見るとどうしても大成し得る見込みがあると思ふ、火災保險が三期で處女配當をするといふのは本邦でも記錄破りらしいが、夫れも十萬圓近い積立てを社內に保留しての配當である、夫れに株主がよい、殖銀と鮮銀と滿鐵で過半數を占め、鮮內各地の一流の人士が大株主となつてゐる、火災保險料の鮮外流失乃ち內地送金が多額に上る、夫れを防止しやうといふのが此の會社を殖銀の有賀頭取や河內山君などの造り上げた本意らしい、第一總督府の後援があり各銀行の好意的助力がある、經營は素人乍ら例の數字の中に生活して來た河內山君が兀々として當り社員の如き夜業の繼續を本業にするといふ風らしい、唯社長の參謀格たる支配人の玄人は二三變つたのは初めから適任者を得なかつたのかと思はるるが、現任の三崎君は近き將來の常務になる人らしい、此の人は中々堅い地道な保險業者のやうだから近き將來朝鮮の大都市に非常の變災でもない限り餘程よくなつて行くだらう。

朝鮮土地も京城に於ける斯界の第一人者として自他共に許す末森君が專務職に就いてから、多少宛新局面を見せては來た、從來の樣に家賃や地代の取立てを會社の仕事としてゐた日には、此會社は唯家賃取立會社といふにすぎぬ、どうしても土地經營を標榜する以上市內の目貫の地所や家屋の所有は他に手放しても、新たな郊外住宅地の經營とか、新市街の造成に努むべきであらう、唯斯樣な方面に對する總督府あたりの態度が冷淡だとの聲も聞く、夫れも一理はあらうが會社としては他にたよるまでもなく、自力で可能の仕事を進めてもらいたいものである。

將來を達觀し來るべき反動に備ふる準備を缺いだのは大なる失策で

所昇格は稅金を賂課されるのと、株主の最も苦痛とする拂込み徵收

々言ひたい事もあるが、夫れは後日にゆずり、市場當局は米の併合

病床哲學

尾崎敬義

といふことに於て何となく人間らしさをさへ感じたのでありました。外國の何とかいふ詩人が『病中に眞味の親切を盡し得る友人こそ最も信頼すべき最上の友人である』といふたことを記憶して居ります。至極同感であります。弱者（病人）に對する同情こそ、尤も眞劍味のあるモラリテーであることを切實に感得致します。而して又其見舞の內容に對して夫々個性的同情の表現を見ることに尠からない興味を覺へましたのでありました。又當然來べき見舞の來ないものに對しては一種の淋しさを感じたと同時に其人の人間性をさへ疑つたこともありました。併し其も又一種の人生の現れであることを結局面白いと思はない譯には參ませんでした

松本さん。

病床哲學に就いてまだ色々と聞いて頂きたいとが澤山にありますが、どうも昨今病後の衰軀に、ともすると疲れを覺へてなりませんから今日は之れでやめます。何れ其の中ゆる〳〵と御目にかゝつて申上げたいと思ひます。

夕月や尾花の中に我立てりひそかに虫のなく音たづねて

京城雜筆

松本さん。

病中は屢々御見舞を頂きまして忝う存じます。臥仰二十日。私は肉體的には色々と苦悶を覺へましたが、精神的には太だ有益な面白い時間であつたことを告白しないでは居られません。

松本さん。

能く世の中では手や身體や足を動かすことを忙しいと云つて居る樣ですね。會社の重役だとか大臣だとかいふ人は書類を見たり、客に接したり、人を訪ねたりすることを忙しいとの唯一の內容の樣に言つて居る樣です。其他普通一般の人間の所謂繁忙と云ふことは此の身體の運動の事にのみ限られて居る樣です。私は病床二十日間身體の運動といふことは殆どやらなかつたのであります。さうして世事と絶ちベットの上に仰臥し乍ら、天井の節穴を見つめて頭は靜に休みなき運動を續けて居つたのであります其頭のみの運動より生じて得たる私の收穫は、實は過去五年間の私の世間的努力に比しても遙に優れたものがあつたのであります、御承知の通り私の身體は元來頑健でありまして生來病院入などをやつたことはないのでありますが、這回の病院生活が與へた私の沈思默考は私に對して哲學上にも、藝術上にも將た又事業上にも相當に徹底したる產物を與へたのでありました。就いて思ふにです。今の政治家や實業家や乃至あらゆる階級の所謂『多忙なる人』は、二六時中身體の運動のみを以て多忙なりとして、所謂沈思默考の時間を持たぬと云ふことは、何たる不幸なことでありませう。斯樣な有樣では到底大經綸も、大方針も乃至最善の結果も得られないことは餘りに當然ではありませんか。沈思默考といふことは、今更ながら萬卷の讀書よりも、孜々の奮鬪よりも、遙に意義あることだと思はずには居られません。此の意味に於ては、私は沈思默考といふ精神的多忙を二十日間の病院生活に試みたといふことを密に愉快に思ふのであります。

松本さん。

次に私は私の入院中に私の先輩友人諸君より電信に、手紙に、又々物品に色々の方法を以て見舞を頂いたといふことに就き、涙ぐましき氣持を以て感謝を捧げて居るのであります。今更ながら見舞といふ儀禮は病人に對しては是非とらねばならぬことだといふことを痛感したのであります。病床に苦悶する人間に對し、同じ人間が同情の意思を表示する見舞といふ形式程人間味のこもつたものはありません私は私の病中に見舞を寄來して呉れる多數の先輩友人を持つて居る

◈世間ばなし

吉田莊一

朝鮮佛敎の中村健太郎氏、こんな多忙な人も、タントあるまい▲役所の仕事が一人前ある上に、同民會、佛敎團、曰く何、曰く何――關係事業がズイ分ある▲それに朝は、門があくと客、夜は夜で、來客が押かけて行く▲大底なものならテンテコ舞ひする處を、曾て氏の疲れた面地や、イヤな顏したことを見たことがない。

秋風

東拓平壤支店　佐々木久松

×

秋風といふ見えぬもの吹き起り巷は悲し魂のごと
冥府への路に我立つ心地すと獨りつぶやく秋風の街

×

寢て讀めば本の中より一條の女の髪の出づる秋の夜
一條の黑髪にさへいと高き香り此夜を單むる心地す

×

夕まぐれ女鏡に打ち向かひ思ふ事なくり梳り居り
梳る女の髪に鏡よりほの靑き光かへす夕暮

×

寢て聽けば秋の聲こそ烟より飄々として起るなりけり
灯せば秋の風吹く胡瓜畑まざ〳〵として照らされにけり

凡人の閑

笠原要太郎

私は此六月田舍から來た浪人で、京城府民として最新米である。朝鮮でも南鮮地方といへばもう櫻の蕾も大きくなつて、人は皆指を折つて、觀花踏靑の日を待ち焦れて居るといふ三月末私は過去十三年間の俸給生活に暇をつけて、官界を退いて、今家事上の都合から當府の人となつて居る。それで退官當時の一二ヶ月は俄に籠の鳥か放たれた樣な重い荷を卸した樣な、又人間として爲すべき仕事を爲し了つた樣な、何とも云へぬ安心と自由と休息の心境に日々浸つて居た。それは無理はない事で私としては同じ俸給生活でも、物的にも心的にも、共に社會から最も薄遇された職に、永い間忍從の苦を嘗めて來たからである然し私は生を閑日月に送るべく著へられた餘裕の持合せが生憎無いので、畢竟露骨に云へば、尙パンの問題と不關焉で居られぬといふ、眞劍の生の問題が取殘されて居た。そこで三ヶ月目頃から次第に暢氣な心持は薄らいで、是非何か仕事にといふ願望の念が擡頭して來て、日增しにそれが强烈になつて來た。かうなつて來ると、暇がありながら、心に落著きがないので、平素飯より好きな和歌も作る氣になれず、漸く一ヶ月に歌雜誌へ寄する分を二十首許り作る位が關の山、又讀書も若い時から人後に落ちないと自惚れて居て、其の當時は米鹽の料さへ圖書の購入に使つて、家內のお叱責を蒙つたこさへあるのが、却て務に忙しかつた時よりも、今は手につかず、自ら自信を裏切つて居る。そうかといつて、新米の私には勿論嘗飼の友もなく、又親代々の無粹者で、遊ぶことすら知らぬので、此處へ來てからも貴き三ヶ月を徒消して仕舞つた。全く暇が有り過ぎるのも、私の樣な凡人には厭き〳〵する古語の『水流れて急なるも境常に靜に花落ちて頻なりと雖も意自ら閑なり』と云ふ樣な聖哲の人でなくとも他の人であつたら此の五ヶ月の閑暇を有意義に利用したことであらふにと、今更自分の無智無能に呆れぬ譯には行かぬ。但不善丈は爲さぬので凡人であつても、小人でなかつた自身を見出して、獨り窃に慰めて居る。親を失つて親の尊く有難いのが、眞に分ると同樣に、仕事を離れて仕事の貴く樂しいことを痛切に體驗した。幸ひ私は尙回甲の齡迄は七年の距離があり、身體も至極壯健であるから、是切りで活動の舞臺の幕を下ろすのも甚だ遺憾に堪へぬ。早く忙中より得る眞箇の閑に接し、しみ〳〵それを味はいたいと念願して居る。

（八月二十五稿）

二つの讀本

大陸通信社　菊池長風

大正九年頃から朝鮮研究の頭が段々深刻となり十年頃には夢の醒めたやうに朝鮮人に對する同情の熱が涌いて來た。

帝國主義の夢が消へて、世界主義の光りがさして來た、民族讀本を著述して朝鮮の青年に向つて自己の民族を愛すべく自己の文化を尊重すべく自己の祖先を傳統すべき力を養ふやうに願ひ此著述を思ひ立つた。

斯かる心持ちで著述しやうとすれば、或人はそれは民族主義に屈服したものだ、帝國政策に反對するものだ、愛國者より叛逆者となるのだと氣遣はれた、それでも私の頭は依然として朝鮮の青年に其祖先と文化と其民族の光輝とを愛すべく說いて見たいのである、民族讀本の出處は斯る處から生れるであらふ。

朝鮮讀本は只だ內地の少年に朝鮮の風土に親しみを持たせたい、日本の若い人達に朝鮮を理解して朝鮮生活を永久に堅固に平和に續けるやうにしたいと考へて思ひ立つたのである過去三十年間の時代は、內地人の頭に朝鮮を見た反影が色々と異つて居る、私はそれを一貫して只だ親愛の感、共同の情を惹き起すことを考へたからである。

この二種の著述が出來たなら私の朝鮮生活は結末としても差支へない、私は玄海より歸へりてよい。

國境雜筆

山村翠

【三二】

▲彼等に貨幣を授くれば先づ計算し、僞か眞かと確かめ、更に其の音響を聽き、然る後心を安んじて懷中に收む、否袖中に收む『止れ看よ聽け』は彼等の常習である對岸白衣の人が、レール枕に假睡し、夢路から冥路に方向轉換をやる大度量は、中國人に無い。

▲全世界到る所に其の脂切つた顏は分布して居る、彼等は必ず新らしく渡つた所で『止れ看よ聽け』をやつて、然る後商賣を始める、嗟跌の鮮いのもそれが爲めだだ。

▲『止れ看よ聽け』を委細構はず猪突的に進むは、遺憾ながら吾が日本人である、八阪丸の金塊が揚つたからとて、直ちに沈沒船漁りをやるのは心細い。

▲『止れ看よ聽け』は必ずしも汽車の冒險防止に適切なばかりでない、世間の事皆此の注意が緊要だ、滿鐵が貨物驛の構內に建てた制札が偶ま世に處する箴言となるなどは、豪い副產物と言つてよい

▲薄ら寒い或る朝、鴨綠江の岸に立つ、所は安東縣、時計が對岸の新義州と一時間違ふので、內地人の姿は見えぬ、所謂中國人は既に三々五々今日の營みに行くが見える。

▲江を上下する舟も多くはないが既に其の業に就いて居る、これも皆中國人である、帽兒山行と稱する一艘子は、中國人を滿載して居る、彼等の脂切つた顏には、何となく希望の輝きが見える、彼等は嚴冬を山に働かうとするのである。

▲『止れ看よ聽け』これは、貨物驛構內の汽車に對する注意だ、今自分は此標札の前に立つて居る中國人は常に此『止れ看よ聽け』を實行して居る。

◈芝上會の記

石川利夫

壽町の生花及び煎茶の師匠渡邊さんを中心として、芝上會といふのが、成り立つて居る▲その初會を今年の春殖銀櫻井さんのお宅で擧げたので——それが庭上饗宴だつたので、芝上會の雅名がつく▲會員は櫻井さんは勿論、三中井の主人、衣笠病院長、大石南山、岡村介石といつた面々▲勿論、お行儀のいゝ處は、ちんと濟して居るがいざおくつろぎとなると、語呂や洒落の連發、一同なか〳〵おやり召さるとの評である。

三中井の話

妙香山人

◎

廣告に就ての御用談は、火曜日と土曜日の正午から、二時までにおいて下さい、御相談いたしませう。

これは三中井呉服店の一隅に書き出してある文句である。

◎

店員がプンといつて、鼻であしらい、主人は不在――とウソを吐くところを『御相談いたしませう――』何と愛嬌に富んだ文句でないか。

しかも西川清次郎といつた物のよくわかつた、この方面に相當の見識のある人を、廣告の專任者として常置し、西川氏は、物やわらかな態度で、總ての外交者（廣告取）に接して居る。

斯ういふウチは、少くも京城には、タンとない――どんな廣告外交家も、三中井には頭をさげる所以である。

◎

三中井の主人は、中江富次郎氏といふ。京城の店は、明治四十三年に始めて開いたのである

その時中江さん、歳やうやく三十二歳。

中江さんの鄕里は、志賀縣神崎郡金堂である。そして金堂には、今尙ほ長兄の中江勝次郎氏が居つて、父祖代々の業たる、呉服商――即ち三中井總本店をやつて居る。

また次兄は、京都の支店を主宰し、これは西村久次郎氏と呼ぶ第三番目が當地の富次郎氏で末弟の中江準五郎氏は、一昨年から東京に支店を開き、三越、白木などの大敵を向ふに廻して奮鬪中である。

◎

當地の主人富次郎氏は、仲々積極的の人である、腹の据つた人物である。

いち〳〵説明せんでも、この二十年の間に、京城の大三中井と、釜山、大邱、平壤、元山、木浦、晋州――それから鳥致院にまで、支店と出張所を開いて半島の呉服界をマンマと、三中井の掌の上にのせたことで、同氏の腕と志とは判らう。

實に非凡な人物である。

◎

主人は、酒が好きらしい。茶道にも趣味がある。なげ花も稽古して居る。最もすぐれて居るのは謠曲でこれは、その道でも大評判のものである。

だといつて、富次郎氏の氣魄は、こゝに銷磨したといふワケでなく、最近南北支那を視察し『これからは、どうしてもアノ大陸です』といつて居る。

◎

本支店を通じて、店の人三百何十名、當地だけて五十餘名を算ずる。

その中には、水口孝次郎氏のやうな二十年近い勤續者もある十年以上といふと、ズイ分多く、齋藤三郎、村田佐太郎、村西晴次、山本政次郎、奈須好魯大堀虎雄などいふ人々がある。

店の組織もズイ分獨創的な處が多く、丁度軍隊のやうに、いち〳〵の店の人が、それ〳〵の等級に居り、上下、先後の別は整然として居る。

◎

三越や、白木は、いはゞ既成品である。

三中井は、これからの運命を有つて居る。

呉服界の新英雄は、果してどこまで、大三中井王國を、立派なものにこさへあげるか。

◈馬と飛機行

吉田莊一

稷山金鑛の深尾さん、新たに居を蛤洞四四といふにトせられる▲眺望はいゝが、ダイブ邊鄙な處である『これからは馬にでも乘らうかと思ふ』といふと、飯泉さん『馬なんか古い〳〵、飛行機にしたまへ』……なるほどこれからは金山の持主だ、自家用飛行機も惡くないね▲深尾さんといへば、氏のお父さんは俳人である▲今は東京にあつて、靜に餘生を。句に樂んで居られる▲全くの風雅の人である▲金鑛會社の總會は、先きほどすら〳〵と行つた▲どうか深尾さんの新生活に、光榮と天寵の多からんことを祈る。

我家の簡易生活

京城電氣會社　寺村虎重

世態に殆ど變化のない舊時代にありても人の家の生活は年と共に複雜になるが、今日の如く科學が日に月に進歩し、其所產が頻りに利用せらるゝ時代になると、世の中が忙しくなり家庭生活も一層複雜になる。生活改善の警鍾が鳴り始めてもはや十年にもなる、人々の耳にはたこが出來た筈である、然るに改善の方は殆ど其實を認める事が出來ない、大多數の家庭は依然たる狀態の下に蹉きながら悲鳴を發つてゐる。

近時我國の家庭生活に幾分の改善を見たのは婦女子の服裝であつて、改善の效果から云へば全體としては極めて僅少なものであるが流行の點から見れば素晴らしいものである。畢竟主婦達が衣服に對して豐富なる趣味と智識とが有つてゐる事が此洋服萬能時代を作つたのであるが、今日の行きつまつた生活を一新するには更に智識を科學に得て家事能率の增進を計らねばならぬ。それには各家庭生活の中心である光、熱、動力等の用途に適當する電氣瓦斯等について知る事が急務である。

私達は斯の事業に從事してゐる關係から一般人よりも幾分電氣瓦斯に關する智識を有つて居る、之を利用して貧乏世帶であるが世間並に仕事の多い家庭生活を簡易に片づける事に努めてゐる。左に其概況を記るして御參考に供する。

一、風呂

長州風呂に薪と石炭を焚いてゐたが、夏一時間多二時間其間數回の焚き足しを要し煙突掃除も月に二回はやらねばならぬ厄介物なれば近頃瓦斯風呂に改良した。夏三十分多一時間マッチ一本で瓦斯に點火して後は一定の時間を經た時湯加減も見ずに消しても適度の溫さになつてゐる。夏每日多晩日に沸かして瓦斯量一ヶ月一二〇〇立方呎、四圓三十二錢。

二、炊事

普通の瓦斯竈と七輪を使つてゐたが萬能に出來てゐる丈け瓦斯を不經濟に消費する事が多いので、西洋料理器に代へた。上部平面板には七輪三個あつて飯を炊く、湯を沸かす、お菜を煑る三つの仕事が廿分間で出來る。下が皿溫め、其下のオブン、美味しくはないが清潔なお菓子が子供達を喜ばせる

三、燈火

電氣を使用してゐて計量器制で料金を拂つてゐる。部屋數は七間各室に一灯宛つを天井から垂下げ客間と書齋に當てる室には差込プラッグ各一個を取付けてある。其他臺所、便所、風呂場、廊下等に六灯ついてゐて合計十五灯である

器具は客間にはトロジヤリヤと云ふグローブ式のものを取付け一〇〇ワットを使用し、次の間は半間接式のパラソリアを取付け一〇〇ワット、差込プラグには卓上燈を備へ、風呂場はグローブ式とし其他は反射笠を取付けた直接照明式である。スキッチを各所に設けて點滅に便利にし不必用の場所は努めて消す事にしてゐるから大勢の來客の場合の外常時使用するものは三四灯に過ぎない。電球は壘一枚に付一〇ワットから一五ワットまで、普通眼の衞生に適するとせられてゐる標準よりも少し明るいが商賣柄斯うなつてしまつたのである。夜分來客があつた時或人は『お宅は明るいですナア』と驚くけれども、聞けば一ヶ月の電氣使用量は我家よりも多い場合が少なくない。右の設備で我家の使用量は一ヶ月十五六キロ時內外、電灯の經濟は明るい電球をつけてまめに消すこと。

四、雜

電灯の電氣使用量と最低使用量との間に殘る部分を利用し又之れに足し前を出して用ひてゐるものは電氣アイロン、電氣鑪、電氣湯沸しで別に夏は電氣扇、冬は電氣炬燵と電氣シートが飛入りする。アイロンは三封度二二〇ワット、洗濯物の仕上げに一回廿分間使用して一錢五六厘で上る調法、經濟申分なしである。鑪は主婦が裁縫の友になくてならぬもの。湯沸器は客間に卓上電灯と差替へて使用の出來る樣設備し來客の時人手の少ない爲め不行屆でない樣即席で仕度するのである。容量二五〇ワット、五合の水は五分間で沸いて一回二十ワット時、金額にして四厘四毛、電氣扇や炬燵シートの類も輕便に安全に經濟的に良き召使の任務を盡してゐる。

冬の暖室に書齋に宮崎式ペーチカを置いて煉炭を焚き長時間使用の經濟を計り、臺所にはコークス

冬の暖室は書齋に宮崎式ペーチカを置いて煉炭を焚き長時間使用の經濟を計り、臺所にはコークスストーブを取付けて時々の必要に有効なる働きを求めてゐる。來客の時心安き中なれば書齋に通し、其他は短時間の使用に最も有効なる瓦斯ストーブのある客間を用ひる。以上は我家の簡易生活の中心となつてゐる電氣瓦斯使用狀況であつて之に依つて殆ど一人の人手を省き、又經濟的にも利益を受けてゐる。本誌讀者諸賢に對し我家の貧しき經驗を以てお勸めするは甚だ僭越であるが、御參考にはならない迄も我國家庭改善の第一歩が科學智識の吸收と其所産の遺憾なき利用にある事に御同意を乞ふを利用して貧乏世帶であるが世間並に仕事の多い家庭生活を簡易に片づける事に努めてゐる。左に其大灯ついてゐて合計十五灯である。器具は客間にはトロジヤリヤと云ふグローブ式のものを取付け一

友を歎く

角田不案

實に惜しゝ年若かくして死にゆきし河西喜雄を歎くなりけり。
秋風に揉れて竟にちぎれたる芙蓉の花に似たる君かも。
病つひに起つ能はずと知りしとき君が心やいかなりしならむ
秋風の澄みたるなかにあゝ君はあはれ命を落したりけり。
こよなきものに君が愛でたりし清和園に酒をしのむに涙新なり
君あらばとやせん斯くやなしやせんと淋しく集ふ友等なりけり
秋空のすみたるなかを遠くゆく風にのりつゝ君あるらむか。
我河西まこと死せるかやとばかり大聲あげて躍り出てゝも來よ
讀經のなかにしみ〳〵亡き君の亡くなりしことを思ひゐにけり
火葬場の木槿の花は亡き君が靈かとばかり眺められけり。
燒香の煙さゆれて消へてゆく窓の彼方に木槿は白く。
かげりたる火葬場の庭に夕空を見上げなどしてせむなかりけり
友を燒く煙はかなし見かへればかの山空に立ちのぼりけり。
今し燒く友の遺骸をまもりつゝ死にたることの疑はれてならず
言語まつたく通ぜずなりてそのまゝにあはれ眼を閉ぢし君なり
その机その椅子かなし目をやれば君が面かげまた浮び來つ。
醉へば必ず此親爺めと泡を飛ばし强く言ふ癖を君はもちたりし
君が持つて來し秋海棠の花咲くにまた新たなる悲しみの湧く。
何ごともつひに語れず眼をつぶり眼を開きつゝ生きたりし幾日
秋風のさやげるなかに起きつ伏しつ尾花のさまに君をし歎くも

俗人俗語

吉田莊一

◎

朝鮮ホテルの支配人寺澤氏は、仲々の讀書家で、それも外國物ばかり、まるでむさぼるやうに讀んでるとの評判。

◎

總督府の文書課長萩原さんとキマる、人物といひ、文藻といひ、申分はない、今の官海には、あんな奥ゆかしい人は、よけいにはあるまい。

◎

『心の友』といふポケット式小雜誌がある。主幹は大浦貫道氏、一寸變つた人物で、口に筆に一流の信仰を說いて居る。兎に角發行部數三千とは、えらいものだ。

◎

どこの銀行、會社でも、部内で雜誌を發行して居ない處なし。そして内容を見ると、みんな文藝的——時代は文藝時代で、同時に雜誌全盛時代なることが判る。

◎

各寺院でも、大底雜誌をやつて居る。小學校、中學校、專門學校もさうだ。えらい時代となつた。

◎

工藤重雄君が、頻りに志を得ないのは、惜しいものだ。氏は、多年朝鮮での出版業を思つて居る、そして氏は、確に大部分の資格を有つて居る。誰か篤志家で、資を出すものはないか。大學も出來た多數の學者もやつて來た——。どうやらその潮合に近づいたことタシカである。

市内明治町二丁目
中央婦人病院
院長 衣笠茂

市内明治町二丁目
内科 小兒科
中島病院
院長 中島貞信

市内明治町二ノ一〇五
榎本法律事務所
辯護士 榎本隆

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸虎藏

市内本町二丁目
青々園茶舗
電話本局一一一

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

市内明治町二丁目
利根川歯科醫院
院長 利根川清治郎

市内仁寺洞一三六
高橋法律事務所
辯護士 高橋章之助

市内鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

市内吉野町一丁目
内科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

平南山中雜記

滿鮮研究所　市村毅

◎軍隅里から平安南道の境にある杜鵑嶺を越えて、久し振り德川と孟山との郡界までやつて來た、此邊は以前杏の花が眞盛りの頃と新綠崩ゆる頃と滿山錦を飾る頃とに歩きまはつた土地だけに、眸に映るものゝ總てが想出多いもの許りであつた、蒼空に高く大きく聳ゆる長安山や後仙遊峯の姿もうれしく、又其間を北から南へと流るゝ大同江上流の溪谷やそちこちに散在する村里の數々も懷しい。

◎平安南道でも殊更開けぬと言はるゝ此片田舍に日を送る樣になつてから既に一ヶ月以上になる、其間大同江を挾んで東から西へと廣がつた古い地層の間に存する無煙炭を探るために、連日焦げつく樣な太陽の下で山と言はず谷と言はず朝早くから晩おそく迄歩き回つて居た、日に燒けた黑い寶れた顏から大きな汗の玉を滴らして、喘ぎながら山登る苦しさ、然し斯うして居る間に何時か眞夏の暑さも過ぎ去つて秋冷の候が近づかうとして居る。

◎野山を一面に紅く飾つて居たルビーの樣な木苺が落ち盡した今日此頃では桔梗、女郎花、刈萱、さては野菊の花が到る處にお花畑を造つて、草間にすだく蟲の聲が日に日に繁くなつて行く、山里の家のぐるりに鈴生る柿や小さな林檎の紅く熟れた色彩りも、少し宛つ黃ばむで行く梨の色も秋近ぎをそれとなしに物語つて居る。

◎梨と言へば昨年の秋の旅が想ひ出される、山への往復に黃に熟れたのをしこたま買ひ込んで、それを何より樂しみに喰べたものである、今年も當り年と見えて何れの樹にも重そうに生り下つて居る此梨は大きくないが、甘くて稍々澁味があり、山の旅での忘れ得ぬものゝ一つである、梨の村落、此邊ではそうした山間の部落を何處へ行つても見ぬことが無い。

◎秋が近づくことによつて同じ樣に想ひ出すのはタレと山葡萄の味であらう、その中でもタレは極く高い山でなければ見られぬアケビ樣の小さい果實で、霜降り始める頃になると眞の甘さを味はふことが出來る、實際奧山の生活にあつてタレの實の味こそ永く忘れることが出來ぬものである。

◎德川郡から孟山郡へかけては水の清い處である、夾灰層をとり圍んで廣い分布區域を有する石灰岩地では何處からとも無く奇麗な水が湧き出て何處ともなく河底へ消えて行くのを氣付くに違ひない又砂岩や頁岩の重疊する山の肌からは水晶の樣な泉がこん〳〵として絶えず湧き出で、それ等は相集つて溪流となり河となり大同江へと吸はれて行く、斯うした泉の畔に佇んで見るならはどんなに暑い日でも涼氣が肌に浸み入る樣な感じがする許りでなく、試みにその中に手を入れるならばその氷の樣な冷たさに全身の汗が一時になくなつて終ふであらう。

◎大同江によつて横切られ、高い深山の裡に埋もれて居る此附近は慥に山紫水明の地である、一日試みに大同江畔を三豐里あたりから郡界の桃田里あたりへかけて逍遙ふたとし給へ、行く〳〵數十丈の絶壁の下を藍を溶かしたやうな美はしい水が靜かな淵をなし、或は處々瀨をなし、奇巖に枝差し交はす樹々の綠とそれとが映り合つて、誰しもその眺めに見惚れぬ者はないだらう、又好く晴れ渡つた日に後仙遊峯あたりの高峯の絶頂を極めて見給へ、脚下に展開する大小無數の山々と遠く淡紫に浮び出た咸鏡南道や平安北道境の高い山脈とその間を迂曲して白く輝く大同江やその支流などの美しく然も大きな眺めは吾人人間共の姿を如何に小さく見せることであらう

京城雜筆

◈慾張つた話

平田久雄

朝鮮ホテルに泊る客人の間には、大部ボーイに對する小言がある▲曰く、呼んでも仲々やつて來ない曰く丁寧でない。曰く、用事を命ずると、ぶり〳〵と面をふくらせる。等、等、等▲處が、この間やつて來た野球選手の石井氏、大にほめて曰く『朝鮮ホテルのボーイは、結構だ……アメリカ邊りの宿屋へ泊つて見給へ、茶を持つて來る、金だ。電報をたのむ、金だ電話をとりつがせる、金だ。その煩々しいこと、慾張つて居る事、とてもお話にも何んにもならぬ』

髮に七つ道具のものあり。遊轉

折莖集

池部義雄

世の空拳を浴び乍ら、札幌の一隅に嘯く、無獄の罪人――貞操の赤化――俳道もヘンナ處でバンクすると那落まで逆行する雁の鳴くのに浴衣かけでも、四十女の血は燃ゆる。

◆

チブスの先曳きに、コレラの後押し、貧乏世帶に脅威の多さされど病菌盲にして、權門御座れ曾厨撰ばず、無差平等に食ひ入る處は人生運命の構成要素として、可愛い處がないでもない

◆

廟堂には立てず、多議には航げず。無償に扱はるゝは戀のみだ。血道で騒ぐも無理ではないされど其甘味も春の一夜だ。服從を強ひられるやうになると、苛稅のにがみがある。愛の甘みは抱合心中、人の死亡は在職中戀も譽れも花時だ。

◆

秋の呱聲が街に立つて、明治町の一角に、ウエータの双物三昧。悲觀にしろ、面あてにしろ純白のエプロンに血球を飛ばす染め粉でない丈け、くれなゐは活きて居る。

◆

服む間で働け、服んだ積りで貯へよとなら。お上の御沙汰もきこえるが『御贈答品はこれに限る』ナンテ有害無効の煙草の押賣り、寐醒めの悪い矛盾の幾年かサット足を洗つた青木サン今や公道を行く良二千石、南鮮の秋も月は冴えやふ。

◆

虚僞の絶滅は女の白粉を嚴した時、而るに近時男にして袖にしのばせるものがある。文化は僞善を擴大する。女にして手入らずの斷髪者あり、男にして撫髪に七つ道具のものあり。逆轉の片鱗は先づ頭から。

◆

引きづられ削づられ、而して終生被告者の位置に座すれば、有難き浮世の御眞體は一目で見ゆる。蓆は三等の屋根裏に限る樂屋は見透かし、腹這ふた爪さきに月はこぼるゝ。貧者の富は金で買はれん。

◆

秋風颯ッとして千里潭碧の空山高水明、惜しげもなく『自然』は開放した。河豚のチリに黄燈子の酢、生命がけに滿酌しやふ?、生れて茲に四十餘年、何一つ鳥のついたことのない身の上だ。

◆

暮秋に刮目するもの二つ、遠くば『朝日』の世界一周飛行。近くば仁川沖の青砥藤綱。

◇是韓堂主人

石川利夫

自ら是韓堂主人と號するぐらゐ朝鮮ビイキである▲日本歴史よりも、モット朝鮮の歴史に精通して居る▲九歳の時から、李完用氏のうちで養はれた▲朝鮮の人が『あなたはドウしてそんなに内地語ガウマイか』といふ程微塵の隙のない朝鮮的内地人である▲その人、性を伊藤と呼び名を卯三郎氏といふ▲之まで毎日申報編輯長だつた▲十月一日から月刊『朝鮮語』といふのを創刊する▲近頃の月刊物中では最も信認を拂ふ可きもの丶一だらう▲大阪毎日に居た金學秀君今度同社をよして『新聞春秋』といふのを始める▲内地でも『新聞及新聞記者』などいふ雜誌が大ハヤリである▲朝鮮にもこの種のものが二ッは必要▲ドウか新聞界の清涼劑――刺撃劑として、活動してくれ▲或る雜誌で、貴下の愛讀書はと問はれて、藤井寛太郎氏が『スマイルス自助論』と答へて居るのは、その人らしく▲矢鍋殖銀理事の『法華經』は、一寸意外！▲谷平北の『日本外史』はいかにも

あゝ河西喜雄君

―安らかに眠れ―

京日編輯局長　角田廣司

實にはやいものだ。

河西君が死んでから今日はモウ十七日目だ。

×

ちやうど、その日の今から一時間半後の――九月二日の午後三時であつた、多々見病院に於て君は死んだのである。いよ〳〵これから言ふ前途の春秋を有しながら三十一歳を一期として君はあたら人生の幕をとぢてしまつたのである、君を知つたのは君が大陸通信社から京城日々新聞社へいつてからのことである。あだかもジョフル元帥が朝鮮を訪づれたときのことである。時の外事課長であつた例の松永武吉が、元帥に對する吾等民衆の歡情の發露をじゆうりんした問題に對して實に痛快な一文が日々紙上にかゝげられたものだ、却々によく書いてあつた、實に名文であつた、誰の筆かと思つて、後で聞いて見ると、河西君が書いたものであつた。その時分から他社の人ではありながらとくに君に對してはある期待をもつてみてゐたのである。その後僕は朝鮮新聞社をやめて京城日報社に入り長野直彦君のあとをうけて編輯局を僕があづかることになつてから君は昨年の四月から僕のところへ來て働いてくれることになつたのであつた。

×

我社へきてからの一年と五ヶ月といふものは實に君はよく俊敏に働いてくれた。君は責任觀念が強烈で、且つ活動力が旺溢してゐて純眞な性格の所有者であり、精勤家であり、ために勇猛家であり、天才的青年記者として社内に於て重きをなしてゐたのであつた。僕は常に君の活動に對して感謝してゐた。思へば君が死の如きは單に一新聞社の損失ばかりではない、寔に半島操觚界の不幸であるのである。

×

君が死んでから今日にいたるまで、一日としてかつて君のことを心に憶ひ出さぬことはない、恐らくこの後とてもさうであるであろう。社の僕の机のすぐ前の机に君は居つた、そのまゝの机と椅子とは依然として空しく並べられてあるが、あの元氣のいゝ君を再びそこに見出すことは出來ない、未來永遠に出來なくなつてしまつたのである、何といふ淋しい悲しいことか。その後政治部の机に高須賀君や秋山君の顔を見るにつけて、君の顔がどうしてもそこにないといふ事は信ぜられなくなつてきて君の顔が眼の前に幻覺となつてちらついてくるのだ。たゞに政治部許りではない、編輯局を見渡すとき、他の皆んなの姿の中に一人君が居らぬ事に氣がつくと、そのたびごとにヤアと言つて大きな聲で君がどこからかは入つて來るやうに思はれてならない。

×

字でも消すことが嫌ひで、非常に克明に、いつも馬鹿に大とい萬年筆で原稿を書きながら、餘程すきだと見へて、よく豚カツ辨當を食べたものだ。君の豚カツ辨當は社内の名高い一つとなつてゐた。その豚カツ辨當の注文を給仕に命ずる聲も、その豚カツ辨當を頑張るときの君が顔つきも、これから幾年たつても、僕等の生きてるかぎり、何年生きるものか知らないが、とにかく聞くことも、見ることも出來ない、愚かなやうな話だが人間の死といふものに直面して今さらながら考へさせられる。

×

人はよく他人の死やお悔みに對して非常に落ついて、冷靜に美辭麗句をさへ並べて、理路井然として、實に行屆いた挨拶をのべるものがあるが、まことに悲しいことには、感激性の强い僕には、情が迫まつてその場合それがどうしても出來ない。河西君の死に對しても、その場合未亡人に對してもまた君のお母さんに對してもそうであつた事を、まことに本意なくまことにすまなく思ふ。例へば君が遺骨を京城驛に送つた時のごときでも、十一二の時から非常に腕白だつといふ君を育てあげたといふ母堂に、今は君は遺骨となつて小さな箱に納められて、そして信州の上諏訪へいくのだと思ふと、もう胸がふさがつて、改札口の前に立つてゐた君のお母さんに單に

極まることよ。その後紙上に君が才筆と敬慕とはまた見ることは出

京城雜筆

州の上諏訪へいくのだと思ふと、もう胸がふさがつて、改札口の前に立つてゐた君のお母さんに單に極めて手短な挨拶をしたのみで、汽車までゆかずに、殆んど堪へられない衝動に眼もくらまんばかりにぶちのめされて未完了のまゝで失禮したやうなたゞひである。

×

君が死に對して、今や一切を謝し一切を祈る、だが君に對して僕のくり言を聞いてくれ。僕は、僕にはどうしても消すことの出來ない、やるせない懸しつけるやうな心殘りがあつてならない、それは君は僕が一昨年患つたと同じ病氣の腸チブスでやられてしまつたからである、定命と言へば夫れまでだが、醫師と醫師の言とによつてチブスでは本來として死ぬものではないと言ふ固い信念をもつてゐる自分としては未だにあきらめることが出來ないのである、忘れもせぬ八月十九日の午後のことである、國際勞働會議に出席した守屋政府代表が二十日朝京城へ著くといふので、『河西君御苦勞だが一つ汽車で迎ひにいつてくれぬか、講演會の事もあるから、だが君は何だかいつもの元氣がないやうだがどうかな』と言つたら、ハア承知しました、大丈夫です、いつてきますと君はいつもの通り快よく引受けてくれたのであつた。二十日は歸社してから守屋代表の車中談、二十一日はその講演筆記をやつて朝刊に第一回をのせ、二十二日は具合がわるいからと言つて社を休んだのではあつたが、それでも講演筆記の第二回分の原稿を社にとゞけ、その夜から發熱が甚だしくなつたのですぐと入院してしまつたのであつた。けれどもそんなひどいことゝは誰れも思つてゐなかつた、入院したのもその翌日になつてから始じめて知つて、河西君が入院したと言つて、あまりに不意なことに皆んなが驚いたのであつた。あとで考へてみると、どうも非常に無理をした事がたゝつた樣に思はれてならない。守屋代表を迎ひにいく時も健康狀態がきつとすこしばかりでなく失はれてゐたことであつたであろう。それならなぜあの場合快諾してくれたか。なぜあの時ことはつてくれなかつたか。それを僕は非常に君に對して怨めしく思ふ。

×

君が入院を聞いて僕はすぐ病院にかけつけた、ところが熱が高いから今日は逢はない方がいゝでせうとの院長の注意であつた、翌日見舞にいくと前夜熱のためになやまされた疲勞と睡眠不足とでぐつすりとねむつてゐるのでそのまゝかへつた。その翌日にいつたときは君は極く簡短な言葉を交はしたのみで、自發的には話し出さずにたゞ人の話をうなづくのみであつた。それから以後は殆ど言語は不通といふ、實にいたましい狀態ではあつたが、最後の日のそれまでそのうち日が經てばいまに話すことも何もかも出來る日の來るべきを信じてゐたのであつた。けれども竟にその日はめぐつて來なかつた。入院してた十日間あまり、その間いろ〳〵と話したい事もあつたろう。定めし聞かせたい問題もあつたであろう。たゞし今となつては、アレも追憶のもと、コレも悲しみの種のみである。

×

あゝ死する人は寧ろ幸福か、生きて生活苦に喘ぐ人のいかに悲痛極まることよ。その後紙上に君が才筆と敢腕とはまた見ることは出來なくなつたけれども、新聞は毎日でゝゐる。君がまだ成しとげなかつたものは、生き殘つたお互がきつとやるから、どうか心安らかに眠つてくれ。

（九月十九日午後
京日編輯局にて）

◈故人の面影

平田久雄

馬野府尹は氣が合つたとでもいふのかいたく河西君の風格を愛して居た▲九月二日、河西君が重體だと聞くと、早速見舞の造花を持つて、多々見病院へ行つたものだ▲處が、この時『たつた今、いけませんでした』と聞いて、府尹感慨無量『惜しい男を死なしましたナー』見舞の花が、佛前の供花となつた▼時實知事、森殖銀理事などやはり河西君をヒイキにしたものだ▲森さんなどは、時々御馳走して『君、本を讀んどるか、どうしとるか』チク〳〵やるので、『ドウも森さんの酒は、ちとニガイ』先生、非常に弱つて居た▲知事さんの處へは、新進畫家の作品を持込んだ▲『君この間買つたばかりぢやないか』と、知事さんが笑ふと『さう〳〵、さう』でした、したが、これを取つて貰はぬと、私か一寸困る』……斯うして、ズイ分甘えたものらしい▲藤原秘書官の京畿道時代、夜中でも何でも飛び込んで行き、飲み且つ氣焰を揚げたものらしい▲時々葉卷なんかやつてるので、『亦藤原さんの應援からかネ』と笑ふと『ヤアお里を知つてますね……』例の哄笑を發し、よくつばきを引ッかけられたものだ。

【B】

靜かに默禱をさゝげて

京日編輯部長　山田勇雄

【四二】

全身を襲つて、ひどく憔悴してゐた發病二日前に――尤も潛伏期であつたらうが――守屋政府代表の講演筆記をひき受けて、連載記事の第二回目すなはち新聞記者として實に河西君の最後の原稿を床の中で書いた。三回目を書く時にはもう熱で筆が運ばなかつたのである。私はこの苦しい君が最後の瞬間まで、責任を忘れなかつた尊い努力を思ひ、敬虔な氣持に充滿し乍ら、開教院で、河西君の靈位の前に靜かに默禱をさゝげたのである。

◇

朝鮮に來て半年、私にとつてはじめての苦しいショックである。

私は常に、自分の仕事に興味をもつて、忠實に働らき、確實性があつて、責任感の强い新聞記者のみを、自分の永遠の友として、つきあつて行きたい。よたで、ごまかしで、てれがくしが好きで、純情的でない不正直な人は出來だいきらひである――京城に來て多勢の同僚の中から、私は最初にその愉快な私の仕事の友達として河西君を見出した。筆の人としていくらかぎこちない肌合ひもあつた。それから書かれたものからも、近代の新聞記者としてなほ進んで行く餘裕を充分に存した。しかし河西君の純眞な性格と、仕事に熱をもち、常に猪突的に努力してゐたことに私は多大の敬意をはらつてゐた。

◇

最近のこと、勞働代表の鈴木文治君が京城に來た時の話しだが、編輯でうつかりそのことに氣づいてゐなかつた。締切まぢかにT君が聞きつけて電話をかけて來たのでやつと夕刊に鈴木君の記事が間にあつたものである。ところが河西君は朝早く鈴木君入城のことを知つてゐたが、社に知らせる考へが出なかつたことを後から申しで、自發的に自分の落度をくやんでゐたのに、私はむしやうに愉快を感じた。

◇

少しばかり氣分がすぐれないでも、すぐ責任のある仕事を休みたがるくせの人が多くある――河西君はとにかく死に直面した苦惱が

◈赤襌の河西

吉田莊一

死んだ河西君は、無邪氣と痛快とを二ツなから有つて居た▲中學を出たのが十九の春、出るとスグ故郷の上諏訪を飛び出し、冒險世界を生地で行く氣で、二十圓の金を有つて、朝鮮にやつて來た▲先づ釜山に著いて、木浦がいゝ處と聞いて、汽船で同地に著いた▲棧橋を上ると、殘るところ懷中金七錢だ、あの先生の事だから、一寸悄氣たこと、想像にあまりある▲町を通る人に『こゝで一番えらい人は誰か』と訊いたもんだ▲『それは理事官の橋本(豐太郎)さんだ』とのこと『二番目のえらい人は』『さあ、それは新聞社長の山野(龍二)さんかな』……いゝ、それで宜いと、その夕暮山野さんの玄關にすわり込み『何でも彼でも働く、今から使つてくれ』マルで浪六物の腕白書生だ▲山野さんは非常に苦勞した人だ、事情を聞いて『君、新聞配達をやるか』『えゝ何でもやります』『それなら當分やつて見給へ』翌日から配達夫となつて、月俸九圓頂戴……引つゞいてまる三年、朝に霜をふんで、夕べに雨を衝いて、先生腰の鈴を鳴らして町を飛んだ▲その間に、先生本を讀む、物を書く、天禀の文才だから忽ち山野さんに發見されて『惜しい男だ、編輯に入れて見やう』これが先生の文筆生活の第一ページ▲物を書くのは、まるで姪する如き嗜好があつた、口のうちで前の文句をブツ〳〵と讀み下し乍ら、次の文句を考へ、次の筆をつゞけて行く▲いかにも愉快さうに見えた……▲先生、野球の彌次と水泳とは天禀だつた▲木浦の海を二浬許り同ふの燈臺へ泳ぐ、途中の潮流は仲々急だ、海そだちの船頭や漁師でも、この冒險は一寸やらない▲然るに先生得意の赤襌をウンと締めて、ザンブと許り……これが故人の大得意。

等な味方の取扱ひを受けた時河西君が非常に不快な面持をしたとがある。だからと云つて彼は理智の

河西君の志を思ふて涙を知る

京城日報社　多田毅三

畢に豚の如く食ひ、豚の如く增加し、働いてさえ居れば檻の中の山猫のやうにパンが與えられる式の生活者に充ちた世に、友河西青苔の死は一大損失であつた。少くとも私にとつてはさうであつた。今にして死に近き頃の河西君の生活を支配してゐた志を思えば一掬の涙を催さずには居られない。彼の野望は正しかつた彼の缺陷は無邪氣だつた、彼の敵意は爆彈兒の如く一大音響を示せば後は可成り平靜なものであつた。彼が正義に憧かれ、人を戀ひ、美を慕ふ樣に私をして彼の一切の缺陷を觀過せしめるに充分であつた。

◇

働かなければ人でない樣に云ふ人にも彼は愛され、氣が利かなければ人でないやうに云ふ人にも亦彼は愛された。いやその上に元氣を愛し、理屈を愛する人々の中に於ても彼は決して人後に落ちないのであつた。それのみか、彼が示す情操上の欲求は最近に至つて恰も世に文學青年と云ふ言葉を以つて扱はれる人のそのやうに、熱烈なものがあつた。一歩でもその事に秀でるとを望み。一時でもその事に浸つてゐることを慰安として强ふる此の世の繁忙の中に僅かの謀反氣と欲求とを滿足させてゐたそしてその有樣の素直さに私は今も思ひ出しては悲しい思ひに沈ませられる。

◇

道邊に人が死んでゐたとて私は悲しまない。矢馱縄に人が增えて山も野も海も人で埋まらうとする勢を示しても太陽さんは知らぬ顏だ。此の調節にチブスやコレラが流行つても天は公平にその病を驚す法をまで人に發見させる、助かるがよいのか、死ぬがよいのかそれは私には決定が出來ぬ、死ぬものは死ね、助かるものは助かれだ但し、但し……人の世に志を持つ者達は死なぬがよい、土を運ぶ工夫。字を書く書記は直ぐ跡がある然し人の世に志を抱く者は一人でも半人でも此の世に多いがよいといふ感情が私を占めて、これらの人の死に涙を拂はさせる。矢張り味方が無くなることは寂しい。

◇

味方といえば曾て河西君と私とは向ひ同志に住ひ、朝家を出る時夕べ社から家路に就く時も亦夜家を出て一家の娯樂を求めに出る時も共にしてゐたのでよく他人から私等の揷度ある友情を越て社の同志仲間で二人が攻守同盟と言たやうな式の相談でもしてゐさうな挨拶を受けたこともあつてこんな下支離にすわり込み『何でも彼でも働く、今から使つてくれ』マルで浪六物の腕白書生だ▲山野さんは險は一寸やらない▲然るに先生得意の赤褌をウンと締めて、ザンブと許り……これが故人の大得意。

等な味方の取扱ひを受けた時河西君が非常に不快な面持をしたとがある。だからと云つて彼は理智のみで靜まり反つてゐる男じゃなかつたとも確かで、あつさりしてゐるやうで仲々氣むづかしいこと私と同格であつた事の事證を樣々思ひ出さないでは居られない。然し彼れは氣むづかしい時間を非常に有効に使つたのであつた。此處が私の鈍重に比して彼の才智的な處であり出來のよい處であると平生私は思つてゐた。

◇

又、河西君は非常に親密で古い交を加藤松林君と結んでゐた。さうして最近は余り河西君から加藤君を訪れる余暇と余裕とを持たぬ樣であつたが、畫家の仲間で加藤君のことなどが論じられる場合、河西君の態度や、河西君が加藤君に對して懷いてゐる信念などほの見えて、私は横から愉快であつた人を見るに公平だつたし、人を信ずる力をも持つてゐたし、惚れられる資格のある男であつたと思ふ

（最近私は鼻を病んでゐて何うも氣持ちが動物的でいけませんから號を追つて、彼を主人公とした讀物を書かせていたゞきます）

◈弱氣の將棋

吉田莊一

河西君は、碁も將棋もドッチもやつたものだ▲併し乍ら到底物にならぬ、見込のない、ひどく弱氣一方のものだつた▲どこか、氣の弱い、やはり若死にするやうな處があつたと、今になつて思ふ▲しかし、ヒドク好きだつたな……。例の大きな聲をして……。

〔四三〕

京城雜筆

魚摑みの名人が地に落ちた

京日政治部　高須賀虎夫

河西君は水泳の達人であり、魚摑みの名人であつた。之までよく角田サンのお宅や私の陋宅に來て互に觴を洗ひ、彼れ謳へば吾れ吟じて盡くるところなく夜中の一時二時迄も呑み過したことは珍しいことではなかつたがそれが屹度一座も亂れる頃になると河西君の魚摑みの自慢話しに移るのが例だつた、あの信州の山奥から出て來た河西君の口から此の魚摑みの話しが出るのだから私達も一層奇異の感じがし、それに我々仲間にも何れも相當の珍聞奇談も持つて居るのだけれども、此の魚摑みの話しだけはそうした奇異の感じがするだけ會したものが必らず耳を傾けなければならぬ何時も河西君だけの持ち得る珍談として私達の仲間にも取扱はれて居た――そんなことが度々あつた夏の或る日の午後編輯局長の角田サンがだしぬけにこれから清涼里に行かふじやないかと云ふ話しを持出した。元來吾京城日報の編輯局長角田サンは社の歸りなどをときゞこんな風にだしぬけに何を想ひ出すか郊外に行かふじやないかと云ふのが癖である。これがまた角田サンのみに限られた一つの特有性でもあるかの如く思はれ、よく私達も面喰ひそれが因をなしてときゝからだの總勘定をやることも尠くなかつたが……で此の日も例の特有性が頭を擡げたものとして、元來それでなくともそうしたことをやりたい連中ばかりだから、早速相談が纏つてそれから遽てゝ酒や折詰まで用意して、自働車に打乘つて一同清涼里に出懸けたものだ。散策に自働車なんて隨分贅澤な眞似をしたものだと思ふが、今から考へて見ると圖らずもそれが河西君と乘合せた最後の自働車になつ居るのも妙だ。其處で顔觸が角田サンと河西君と多田君と私の四人……別に鳥の音を聞いて樂しまふと云ふやうな詩人も居る譯でなかつたが、所謂松翠枝を交へて溪流混々とゆくと云ふやうな頗る詩的な場所に座を構へ、一座胡座をかいてそれから持參の冷酒や折詰を開いて呑み初めた。すると冷酒を一杯呑んだ河西君は早速洋服を脱ぎ捨てゝ例の毛脛を深く現はし溪流に飛込んで得意の魚摑みの實演をやると云ふ譯だ。私達も平常其の珍談は聞いて居るが、實はそれは珍談としてのみ取扱つてゐただけに『何！摑めるものか』と心中では少なからず馬鹿にしてかかつてゐたが、サテいま其の事實に直面させてくれようと云ふのだから遽かに興味を以て之を迎へることになつた。ところがあの長い手をおい繋つたくさの下に突つ込で大分魚を探して居た模樣だが、一向其の効果が見えない『ざまあ見ろ！何が摑めるものか』とあらかじめ馬鹿にして居た信念を私達は一層強めなければならなかつた。すると『どうもまだ少し寒過ぎるので魚が上つて來てゐない……然し殘念だなあ』と河西君もぼちゝひとり言のやうな愚痴をこぼし初めた――と、どうした塩梅だつたかそうして居るうちに上の方から大きな鰻が一匹流れて來る。ひよつとこれを見つけた河西君『隼』そのもののやうにヒヤツと奇聲をはりあげながらあの長い足ピョンゝと如何にも巧妙に水面を走つたと思つたらぱつとその流れて來る鰻を見事に手摑みにしてしまつた。其處でよく見る河西君の得意滿面の顔が此の時も遺憾なく發揮されて『どうです』……と頗る冷靜なものの言ひ方だ。全く下手な手品師以上の此の珍藝にはみんな吃驚せずには居れなかつた、そしてやつぱり魚摑みは河西君のみの持ち得る珍藝であつたと云ふ事が私達の結論となりそれから歸りにおでんやなどを泳ぎ廻つて要するに一升瓶につめて持つた歸つた筈の鰻の行衛は翌日どうなつたか判らなかつたが……其の後河西君の魚摑みの話しだけは社内でもたびゝ話題になつて居た。そのことがあつた二ヶ月と經たぬうちに、まるで人生が馬鹿らしくなるやうに河西君はころりと死んでしまつた。恰も此の魚を手摑みにすると同樣に、またあの山奥に生れながら二里も三里も平氣で泳ぐと同樣に新聞記者と云ふもののコツを充分呑み込んでゐた河西君、魚摑みの名人河西君はわけもなくぽろりと地に落ちた。私は河西君と同じ政治部に机を並べ、互に足らざるを補ひ、足るを分つて終日仕事を續つた、然しそんなことが何になろうか『僕は今度は死ぬるのじやな常に愛してゐた『青苔』の雅號を戒名に入れて貰つてせめて『淨青

治部に机を並べ、互に足らざるを補ひ、足るを分つて終日仕事を續けて來ただけに人一倍此の魚摑みの名人がぼろりと地に落ちたことが痛ましい『今一いきだ〳〵』と何か話しの出るたびに私も河西君の心を充分引緊めてゐた心算であつた、然しそんなことが何になろうか『僕は今度は死ぬるのじやないかしら』と身をきるやうな一言を殘してそれつきりものが言へぬやうになつて河西君は死んだのだ私はいま故人を慰める何ものも持たない。然し私は河西君が生前非常に愛してゐた『青苔』の雅號を戒名に入れて貰つてせめて『淨誉青苔居士』として貰つたことだけでも故人を慰めるものではないかと、それによつて漸く今の私の心を慰めて居る。

小閑雜筆

石川利夫

◎龍山驛長の荻原三郎氏、今度營業課にかわり、そして近く洋行する。若い法學士で、會つてまことに感じのいゝ人、マア多年の宿望が酬はれたといふ處だらう。

◎洋行中は、樂なもんでせうといふと『イヽエ仲々以て、あつちに行つて、ズベラをやつてると、判らぬと思つても、いつか尻がバレル、折角行つたものなら、僕も懸命に勉强する……』

◎營業課の窪田さんが、面白いことをいふ『自分の好きな文字を並べ、自分のいひたいことを書かせてもらつて、そして貴社からお禮をいつてもらふ、どうもこんな果報なことはない……』

◎鐵道局長の大村さんは、酒も煙草もやらないさうだ。そして、風紀のことは、それは〳〵喧ましくいつてるさうな。尤も、天性寬厚の長者で、隨分わがる處は、わかつても居るし部下には厚い人であるあるさうな。

◎副參事の林原さん、口數の少い人で、何をいつても唯だ『ブム〳〵』と答へて居る、所謂重厚の君子だ、が、氏一たび壇上に立つと、條理井然たるものださうな。

【四五】

詩學故事抄錄

古城梅溪

侯嬴

戰國魏の侯嬴年七十六、梁の夷者監者となる。信陵君無忌其の計を用ひて符を竊んで趙を救ふ、嬴語ふ公子の行く日を數へて以て晉鄙が軍に至らん日北に鄉ふて自ら剄ね以て公子を送らんと云ふ、後果して然り。

（史記に見ゆ）

侯嬴、大梁豪。白首仍抱關（廷相）信陵公子如祖間、長向夷門感雋恩（薛濤）夷門得隱淪。而與侯嬴親（景明）侯嬴重一言（魏徵）大梁車騎日如雲。客散夷門酒半黨（于鱗）公子爲嬴停駟馬。執轡慈恭意愈下（王維）悲謂感慨同夷門（高啓）策馬夷門道（茂秦）至今豪俠士。猶說信陵君（同）

大鵬

北溟に魚あり其名を鯤と爲す化して鳥と爲る焉其名を鵬と爲す背泰山の如く翼垂天の雲の若し、上る者九萬里然後南を圖り且に南冥に適かんとする也（莊子）

鵬鷃逍遙俱自得（元美）寄語圖南爭矯翼（同）縱橫未展垂天翼（中行）圖南未可料。變化有鯤鵬（景明）雲垂大鵬翻（李白）雲鵬忽飛翻（同）希君生羽翼（同）時輩相鵬擧（高適）猶餘萬里南溟在。莫向蓬蒿惜羽翰（明鄉）萬里大鵬飛（李嶠）垂時詫有扶搖力。六月東南見化鯤（夢陽）尺鷃大鵬俱飽飛（景明）逍遙篇作鯤鵬化（九齡）北海風搖能展翼（道昆）

厄年觀

廣江澤次郎

◎

勝氣な私、元氣者の小生、成敗利鈍毀譽褒貶は我不關焉、人事を盡して天命を俟つを標語としず天時中活動する私にも、細雨降りしきる朝靄るゝに任せ物の哀れを語る秋草や、唧々とすだく蟲の聲に感慨に耽り、孰らゝ々人間の强味と悲哀を飽喫して厄年觀を叙し、内々先輩や友人に正直に内兜を覽に入れ、玆にお笑草を提供する

笑ふ門には福來る、福は内！、鬼は外、呵々（奉天にて）

◎

乙酉年生れの私は、本年不惑を越す一つ俗に云ふ前厄！、元來自分の年齡も忘れ勝の事とて、厄年が何だと許りに一蹴し去らんとしたが、執拗なる運命の神の惡戲か嚴父の慈悲を如實に示す天帝の試練か、兎に角不測の災厄相踵ぎ、困難重なり蹙り、珍らしく健康も害し、弱音を吐く譯じやないが、本年は多く事志と違ひ勝！、イヤハヤ閉口頓首仕つた、併し痩我慢の私は『憂き事の猶此上に積れかし限りある身の力ためさん』と細腕を撫し、紫煙を輪に吹き素然自若？……。

◎

慶長の昔、上杉景勝會津に謀叛を企てし際、德川家康自ら出征せしが、大阪方の急變を聞き、直に軍を回らして西征の途に就かんとせし時、老臣の某『西は本年塞がりにて候、塞がりに向つて御戰ひは御武運如何やと存ず、是非御再考仰ぎ奉る』と諫めたが、家康言下に之を斥け擊を勵まし『西塞がりなれば吾行て之を開かん』と書夜兼行軍を進め、關ヶ原に大捷を博し天下の覇權を完全に收めた由

私に家康の勇はなくとも『人間萬事塞翁が馬！、吉凶禍福糾へる繩の如し、色即是空、空即是色ヂ』と簡便な悟道徹底した人生觀の下に、數奇な運命と闘ひ乍ら、セッセと働き續けて居る、而して今後は一層修養にも努め信仰に生き、臍下丹田の力を培養し、厄年突破後の劃策籌備に餘念がない。

無駄の話

別府八百吉

九月の初め筑前の田舍に歸省し乘合自動車を待つてゐた、そこの茶店の椽に僕の村の山下君といふのがかけてゐる、僕と話し〳〵マッチをすつて煙草をふかした、そしてそのマッチを煙草入れと共にかたはらに置いた。

隣村の繭ウリに來た男らしいのが、天氣のあいさつか何かして、その山下君の置いたマッチをとつて煙草に火を點けやうとした、すると山下君は云つた。

『モシ、夫れは金が懸つてゐます此のロハのでつけて下さい』

椽の少し向ふにはゼンマイ線香の煙りがゆら〳〵上つてゐる、夫れを山下君は指さした、隣村の人はぬいたマッチ棒を又箱に入れ、すなほに應じた。

僕は此の山下君のしまつやな事を知つてゐるが何といふ徹底したしまつやだらうと密に苦笑した、然し深く考ゆるまでもない、此の山下君流の行き方――つまり無駄を省くといふ生活――は吾々にとつて頗る緊急な問題ではないか。

米が高いといふ成程米高は困るしかし一人でいくら食つても一月に一石二斗だ、五十錢の米でも六圓にすぎぬ、米商を八金しく口先や筆先やで云ふ人の内にはカフェーで一夕洋食を食つて一月分の米代を消費するを多く意とせぬ者、何か機會さへあれば飲み食ひの餘計な會合を目論むものが多いのはどうしたものだ、そして頻りに生活難を口にする。

山下君のムダを省くやり方の可否を別とし、ああした考へを物事に對し同胞の多くがもつことになつたら物價問題の解決や、對外支拂超過といふやうなうれひは多くの月日を要せずして消散するであらう、吾等の生活にムダの多い事を各人に考へ、そしてそれを出來得る限り省いて行くのは國民經濟の本筋復歸となる、朝鮮に於ける贅澤品重稅賦課後輸入の激減せるは好い傾向だと思ふ。

名前をいへといつた時に筆を貸せ書いてやるといつて貸した

私に家康の奥にたるべき高事業翁が馬！、吉凶禍福糾へる繩の如し、色即是空、空即是色サ』と簡便な悟道徹底した人生觀の下、僕は此の山下君のしまつやな事を知つてゐるが何といふ徹底したしまつやだらうと密に苦笑した、

京城雜筆

非常線（上）

京城佛教慈濟會　小水眞二

場所　町はづれのカフエー
時　或る日の午後
人物　A、Bは非番巡査、Cは會社員

C（Aに向つて）オイ何だつてそんなに沈んで居るんだ、呑めよ講習所を出た當座は仲々呑んだのに、近頃はサッパリ駄目だな

A　イヤ別に呑まないわけじやないが子供が殖えてくると君のように呑氣な事ばかりはいつては居れないよ、君之を讀んだ事があるかい。

C（Aのさしだした雜誌を手にして）柄にない讀書をはじめて居るんだな（Cは目次に眼をやりながら）君のとこの親鄰さんの文が載つて居るな、あれでこんな事を書くのかい。

A　マア最初の小話を讀で見給へ

C（默讀を續け讀み終るとBに手渡す）これかい、此男は何處かの判事か檢事だらう、案外くだけたものを書くな、裁判の時もこんな調子でやつて居るんだらうか。

A　サアそれは知らぬが君はこの非常警戒を讀んでどう思ふかね

C　ドウ思ふかて君やどう思ふかね

A　そうだな、こんな時は腹が立つても下級官吏の情けなさ、振りあげた拳で罪のない机でもなぐるより仕方ないな。

C　仕方ないて情けない事をいふ男だな。

A　だが君、其男の引捕へたのは檢事だとか書てあるじやないか

C（酒がまわつてやゝ興奮して居る）檢事と書いてあるよ、檢事だつて何だつて考へて見給へ和服姿で居る所を見ると何處かで一杯やつて來たのかも知れん怪しいと睨まれたのが自分の不幸さ、溫順しくして居るがあたりまへじやないか、それに非常警戒をやつて居るんだ位は職掌柄分りそうなものだ、夫に面白半分に神聖な行動を妨げるなんて俺が其男の立場にゐたら名前を聞いた時にそんな生意氣を吐かしたら斯うやつてやると（彼は堅たそうな拳を振りあげてBの頭をゴツーン。）

B　アタタ、オイ何をするんだ、俺だよ間違へちや困る、アーイタ（頭を撫で廻して居る）

C　いようこれや失敬〳〵代償につぐとでもするか（Bの杯に波々とビールを注ぐ）アハハハ君だつたらそんな時にやどうするかい。

B　俺かい俺だつたら君のように腕力は出さぬ。

C　なに腕力は出さぬ出せないんだらう。

B　腕力などそう簡單にだしちや威信にかゝわるからね。

C　それじや君に聞くが相手が檢事だつたといふ事で威信のなんのと言つて居るが若し其時書錄名前をいへといつた時に筆を貸せ書いてやるといつて京城○組人力車挽子何某と書いてヤア御役目御苦勞〳〵といつたらそれでも君は默つて居るかい。

B　馬鹿をいへ、そんな時にや大に勇氣を振ふよ。

C　サア其處だよ、兎角人間といふ奴は弱い者の前へ出ると無暗と威張りたがる、圖々しいものだよ丁度其檢事のようにな。

A　實際人間はちつぽけな虚榮で人を苦しめ自分を苦しめて居るのだ、こんな事を思ふといやになるな。

C　君等の仕事は割の惡い仕事だ酷い目にあつて働いた所で社會は夫程認めてもくれず、上の者には頭があがらず勢ひ下に向つて強くはたらくからつまり吾々如きの人民は迷惑をするわけだ

A　そうでもないよ、が併し筆者はさばけて居る丈あつて案外吾々に同情があるよ、非常警戒の時は皆從順でなければいかぬといつてるじやないか。

C　オイ〳〵何を云つてるんだ、この男の言つて居る事は君等に同情して云つてるんじやないよ法の前には吾々は平等だといつてる丈なんだ、どうせ外へ出て肩書などを利用して威張りたい奴は内で嬶に頭のあがらぬ奴だよ、檢事とかいふ此男なども夜分遲くなつた言譯にこさへた茶番だらうよ、どうせそんな奴に限つて今道で巡査をヘコマしてやつたよ、ソウそれは面白かつたでせうね位で悦に入つて居る輩だ、そんな輩の茶番のために尊い人間の生命財産の非常警戒が少くとも其間おびやかされるとは怪しからんよ。（つゝく）

【四ヒ】

の本筋復歸となる、朝鮮に於ける贅澤品重稅賦課後輸入の激減せるは好い傾向だと思ふ。

京城雜筆

變手古な自殺

赤誠同志會本部　淺岡信堂

◎自殺法としての切腹は、日本古來の傳統で、吾々には少しも奇拔と思へないが、西洋には隨分奇拔な自殺法がある、其中で一つ二つ考へて見る。

◎佛國の或る青年が何か最も奇拔な方法で自殺して、世間をアッと云はせて見たいと思つて、いろ〳〵と工夫した。その擧句大きな炬火を拵へて之れを身體に縛りつけて火を放つて燒死した。又或る男は石油を引冠つて火を放けて目的を達したのもある。

◎又佛國の或る商店の書記が家底の不和から自殺を思ひ立ち、いろ〳〵とその方法を工夫して考案の結果遂に考へ出したのが、自分の身體を爆發さすことであつた。そこで彼は爆發藥を一と通り買つて來て、硫黃の粉末と硝酸加里と夫れを別々に菓子に包んで水と共に呑み込だ。やがて二つが胃の中で化合すると共に爆發して、粉微塵となつて死ぬるであらふと思ひ乍ら、彼れは靜かに床の上に横になつてゐた。處がこんな簡單な事では爆發の可能性がある筈なく、軈て鹽酸加里に依る、激烈なる痛が起り、苦しさに堪へ切れなくて、人々の救ひを求めたので、醫師の許に走り生命はとりとめた。

◎或る時ロンドンの外科醫が一日床屋へ行つて散髮をしてゐた時に髮を斬り乍ら、近所に在つた自殺者の話しをして居た。醫者は人間の首の構造を詳しく話し乍ら、話しは油が乘つて、頸動脈の切斷が才も確かな自殺法であると語つた。その話が終るや否や床屋は奥の室へ這入つて、今醫師のいつた通りの方法を以て、頸動脈を切斷して自殺して終つた。

◎我國では淺草の十二階から飛んで死んだのや、巖頭の感を遺して華嚴の瀧に飛込んだのや瓦斯を部屋に充滿さして寢て居るうちに往生安樂と洒落込んだのや、高壓電線に鐵線を引掛けて目的を達したのや、自ら穴を堀つて其中に這入り、上から大石を以て蓋を落す仕掛にして遣り損つたのや、奇拔な自殺は隨分澤山ある。

◎僕が實地に見た自殺も隨分奇拔の中へ入れることが出來る。時は明治二十五年信州と上州の國境碓氷峠の鐵道工事中第七號と第八號の中間でシヤフトを掘つた中から水が澤山に出て工事が捗らぬ。技師はモーターをかけて水をかえ出して居た。或る日一人の青年水揚げ機械のぐる〳〵廻るその中へ飛込み自殺をやつた。恰も飛び込んで間のない所へ通り合した僕は附近の人々を呼んで救い出したが右の足が膝の上の所で切斷されて右の手首が失くなつて居たが、生命は助かつた。

◎今一つは明治四十一年五月、北朝鮮の羅南から鏡城に出る峠の中程で時は夜明頃であつた。僕は道廳に急用があつて、夜の引明けに羅南を立つて、此所を通ると叢の中でゴソ〳〵と物音がする、是は不審議とコワ〳〵立寄つて見ると血みどろになつた男女の二人、深い草の中をのた打ち廻つて居る聊か驚愕したが、氣を取直して、羅南に居り人夫を連れて二人を擔ぎ出し、濱醫院に入院さした、女は二發のピストルをうけて、咽喉部を傷き一發は貫通し、一發は彈がまだ殘つて居た。男は一發を自ら咽喉に當てゝ打つたが、見事に貫通したのである。男は清津の床屋で僕の知つた男であり、女は同じ土地の料亭醉月の酌婦であつた此の女も見知り人である、女は三日目に死し、男は貳週間の入院で救はれた、入念なのは此男の懷中にはダイナマイトも二發用意されて居たが、夫れを使用するに至らなかつたらしい。今日ならば、片劃心中として、自殺幇助罪に問はれるのであるが、併合前の出來事とて警察でも之が處置に困つた。僕等が斡旋して旅費を據金して生殘つた色男を出發させてけりをつけた。

◈筆のしづく

平田久雄

明治町の木村屋は、老母堂が大變エライ人ださうな▲禪宗の信者で國學の嗜が深く、和歌は非常にお上手▲店の人が戻つて來ると『お歸りなさい』やすび時は『どうぞ御ゆつくり』主從の間が、羨ましいほど、まるく行つて居るさうな▲繁昌するのが當然だと、知人はいつて居る。

秋日雜記

くものがある。

しかし、私はその荒涼客意が

秋日雜記

永樂町人

◎

朝鮮の田舍の驛路を行くと、今でも驢馬を聞くことが出來るからうれしく思ふ。

◎

曉に、あの鈴を聞くのは、いゝものである。

夕べに、あの嘶きを聞くのは、悲しいものである。

◎

旅愁といふのを、古人がしみ〳〵味はつたのは、さういふ時だらうと思ふ。

◎

都會の莊麗な西洋宿に、果して旅愁があるだらうか。

◎

朝鮮では、マダ砧を聞くことが出來る。

砧の淒音といふものは、いゝものである。

◎

朝鮮では、月が殊にうつくしいから、樓臺にのぼつて、ほのかに起る滿城の砧を聞くのは、何よりの情景である。

◎

秋夜は、朝鮮のやうないゝ處は少なからう。

大氣がしつとりと落ついて居るから、風が騷がず、月も、星も、凄然として、靜に、我々の平和の眠を護つて居る。

物を考へる人には、朝鮮の秋夜は、ふかく寵まれて居るのである

◎

しかし、我々は、朝鮮の秋の晝を、讃美せずには居られない。

何といふ明快な碧空だ。

何といふ淸涼な大氣だ。

そして、何といふ堂々たる白日だ——太陽だ。

とても、こんな壯快な自然界は他に多くはあるまいと思ふ。

◎

都會の巷を歩きつゝも、ふと大氣を嗅いで見る氣になる。——餘りに淸朗だから、ほのかな芳香でもあらうかと。

◎

碧空は、淒く晴れ、ふかく天の內臟を見ることが出來る。

その果てしもない、遠い蒼茫を仰ぐ時、何とも名狀し難い一種の情念が起る。

◎

百姓家の屋根に、まッ赤な唐辛子の、秋を飾つて居るのもいゝ。

涸れたる河のかすかな流れに、紅裙の小娘の、すゝぎ物してるのもいゝ。

この時、秋は、朝鮮らしく飽くまで、爽朗であることを、考へてもらいたい。

◎

山が赤禿げて居る。

江河に、一水だにない處かある

朝鮮の山河は、荒凉落寞だと說くものがある。

しかし、私はその荒凉落寞が面白い。

住みなれし都は野邊の夕雲雀あがるを見ても落つる涙よ

榮華の都の驕りよりも、たまに、は我々は、かういふ處に、嗟嘆しそしてそれを喜ぶのである。

◎

朝鮮の秋は、俳景山水だ。

◎

秋風にしても、朝鮮がいゝ。

大氣が沈實して居るから、容易に動かない。たまに動くと、それは自然のよく〳〵のため息のやうに、たまらない愁心を吹く。

あはれ昔いかなる野邊の草葉よりかゝる秋風ふきはじめけむ

朝鮮にして、この感殊にふかいのである。

◈古城氏近作

石川利夫

古城梅溪氏、あまり頑健とも見えないが、アレで仲々達者▲近來は熱心に公共に盡し、金も出せば、奔走もして居る▲氏に敬服するのは、本を讀むことだ▲夜分などは大抵靜に書卷に親しんで居る▲無論、支那のものが主だが、仲々ひろく涉獵して居る▲だから、演說なども內容がある、主張がある▲趣味は、小閑に詩を作ること……近作を左に。

次水野香雪大人玉礎却奉寄

髣髴如聞談笑聲。時々想起辱知情

雞林草木未回色。待帶薰風尋舊盟

朝鮮神宮鎭座祭恭賦

桑槿本同根。合邦歸一元。崇宮懸日月。明鏡照乾坤。八道風塵絕。千秋雨露繁。仰瞻輪奐壯。喜躍頌天恩。

編輯後記

編輯同人

◎好い時候になりました。讀者各位、定めし御健勝のことと存じます。

◎社友河西君の亡くなつたことを、報告するのは、實に殘念に考へます。けれど、爭ふこと出來ない事實――九月號の『三人を羨む』が、トウ〳〵絶筆となつてしまひました。

◎こんな力の落ちたことはありません。本號には、京日の角田、山田、高須賀、多田の諸氏が、故人を追悼してくれました。よその雜誌では、死んだことが賣り物になつての追悼號ですが、私の處では、そんな輕薄の意味は全然ない故人もこれだけは、諒としてくれることと信じます。

◎本號の原稿で、やかましくいつて、書いてもらつたのは、京電寺村さんの稿です。流石の寺村さんも、大にこまられたらしい。謹んでお詫して置きます。

◎守屋さん、小閑を得て東萊行あすこから稿を送らるゝ筈の處、遂に來らず、多分書くことよりも觀風察俗――つまり材料とりに忙殺されたんでせう――一番のお得意だから、決して不平はいはれぬ

◎毎號十名位新人を加へて行きたいと思ふが、仲々さうは行かぬこれだけでも、相當骨が折れるのである。どうか社友各位は、しかるべき方を、お勸めを願ひます。

◎木浦福田有造氏、まだ三十五六の方――御紹介いたします、同地第一の大富豪であります……。

毎月十五日發行
京城廣告雜誌
發行所　市内舟橋町四三

毎月十日發行
朝鮮警察家庭新報
發行所　市内旭町一丁目一八五

細工の御用は本町
德力へ
電本三九三九
京城
德
金銀白金
地金ノ御用ノ
京城明治町
德力本店出張所
電本一〇八八
一五七二

大正十四年九月三十日印刷
大正十四年十月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　石川利夫
印刷所　京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六

運動のシーズンが參りました

運動家!! は必ず正確な
活動家!! 時計の持主である

瑞西製ニツケル腕時計 アンクル寶石入	金九	圓八十錢以上
同 銀側腕時計 同	金拾	圓五拾錢以上
同 十八金腕時計同	金拾六	圓五拾錢以上
同 ニツケル懷中時計 アンクル寶石入	金八	圓以上
同 銀側懷中時計 アンクル寶石入	金拾	圓以上
同 十八金側 同	金二十八	圓以上

正確 堅牢

生涯使用する事の
出來得る實用時計

京城本町二丁目
標準時計 Ⓜ 村木時計店

電話本局長四七一
同同同三一六六
振替京城三一九〇

◎木浦福田有造氏 また三十五六の方――御紹介いたします、同地第一の大富豪であります……。

電話光化門三〇六

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元 **富田商會**

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

秋向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷
仕立念入り價格は安い
經濟的理想の既製品頗る豐富
▲御注文に應じ特製仕候
京城鍾路一ノ一九
角田洋服店
電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

株會
式社

熊平商店

向上靴

紳士向
學生向
女學生向

各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會舘産業部の製品で御座います、事業の性質から『正しき製作』と『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴一手販賣店

丁子屋洋服店

電話本局
長二四六
二二九
三〇九〇
番

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ
山葉ピアノ、オルガン
鈴木製
ヴアイオリン、マンドリン
獨乙製
ウアイオリン、マントリン
內外管樂器一切
內外蓄音器
內外レコード（日蓄、日東、內外ウインナー）
內外音樂書
樂器附屬品一切
運動具一式
（目錄無料進呈）

京城本町二丁目二十九

釘本洋樂器店

電園一二八三番

朝鮮讀本（新刊定價五十錢）

民族讀本（新刊定價五十錢）

發行所 大陸通信社

電話本局一九九番

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姫や
堀内滿輔
電話本局
八五五番
九〇〇番
〇六五番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

朝鮮商工株式會社

本社　鎭南浦三和町

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實鹽炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）
金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅
金剛山
金剛羊羹
金剛饅頭

京城本町二丁目
亀屋商店
電話二十七番
本局四七五番

三中井呉服店

京城雜筆（第八十號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年十月一日發行（毎月一回一日發行）